

公益財団法人鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（11）

東九州自動車道建設（志布志 IC～鹿屋串良 JCT間）に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 平良上C遺跡

（曾於郡大崎町）

2017年3月

鹿児島県教育委員会  
公益財団法人鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター



遺跡遠景（鹿屋方面を望む）





縄文時代の土器



## 序 文

この報告書は、東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋串良 J C T 間）の建設に伴って、平成 26 年度と平成 27 年度に実施した曾於郡大崎町に所在する平良上 C 遺跡の発掘調査の記録です。

平良上 C 遺跡は曾於郡大崎町に所在し、縄文時代を中心に調査を行いました。なかでも、縄文時代早期の住居跡・集石・土坑・連穴土坑や遺構内外から出土した遺物は、遺跡の周辺や大隅半島における当時の人々の生活を解明する手がかりとなるものと期待されます。

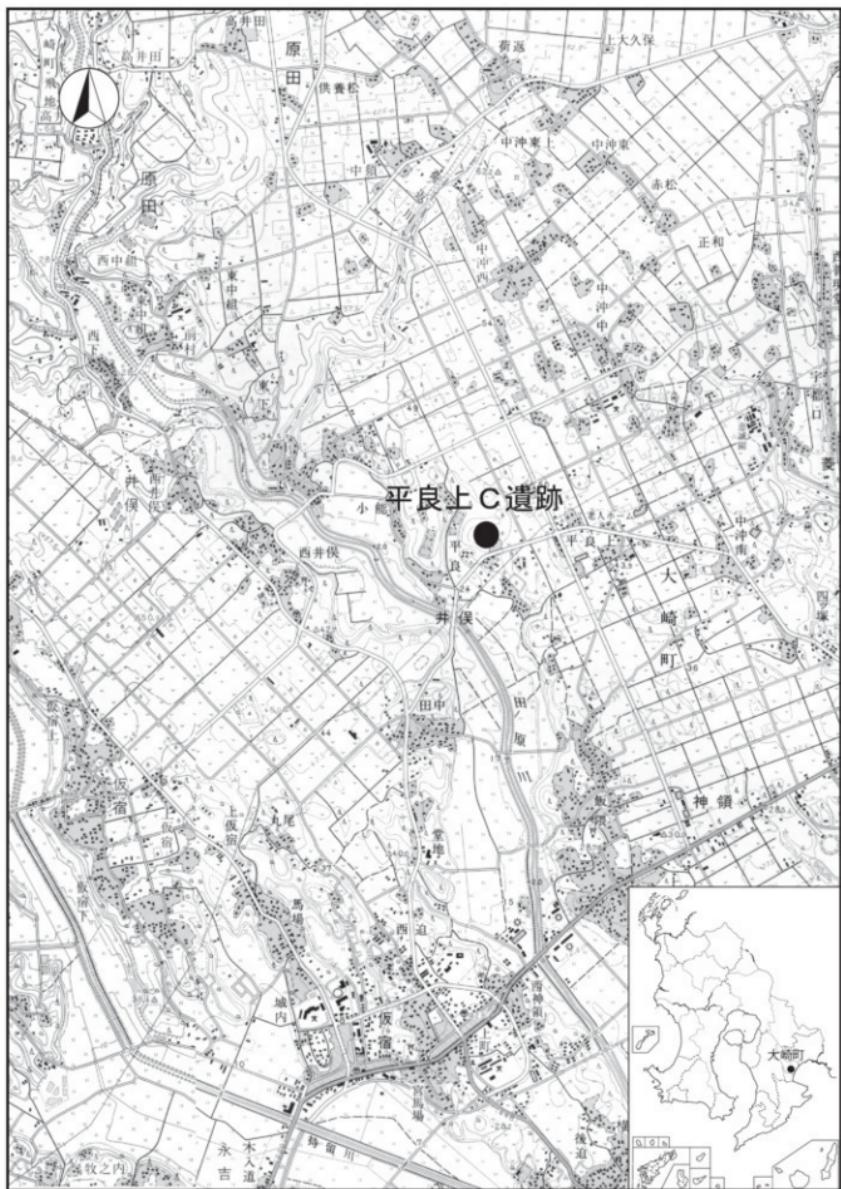
本報告書が県民の皆様や研究者をはじめとした多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財保護の普及啓発の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行まで御協力頂きました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、大崎町教育委員会等の関係各機関並びに発掘調査や報告書作成においてご指導を頂きました方々に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成 29 年 3 月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団  
埋 藏 文 化 財 調 査 センター  
センター長 堂 込 秀 人

## 報告書抄録



平良上C遺跡位置図 (1:25,000)

## 例 言

- 1 本書は、東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う平良上C遺跡発掘調査報告書である。
- 2 平良上C遺跡は、鹿児島県曾於郡大崎町井俣2521番地に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という）が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財团埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という）へ調査委託し、埋文調査センターが実施した。
- 4 発掘調査事業は、平成26年度から平成27年度まで埋文調査センターが実施し、すべてを完了した。
- 5 整理・報告書作成事業は、平成27年度から平成28年度まで埋文調査センター第一整理作業所で実施した。
- 6 掲載遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。掲載遺構番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。
- 7 遺物注記等で用いた遺跡記号は「TRC」である。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 9 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 10 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 11 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者が行った。また、空中写真的撮影は、ふじた航空写真に委託した。
- 12 本書に係る遺構実測図の作成及びトレースは平木場秀男及び福垣友裕が、遺物出土状況図の作成は、森えりこ及び倉元良文が整理作業員とともに行った。
- 13 本書に係る出土遺物の実測・トレースは、土器を倉元が、石器を樋口めぐみが担当し、整理作業員とともにを行った。
- 14 出土遺物の写真撮影は、吉岡康弘及び辻明啓が行った。
- 15 本書に係る自然科学分析は、放射性炭素年代測定・種実同定を（株）加速器分析研究所に、テフラ分析をパリノ・サーヴェイ（株）に委託した。
- 16 本書の執筆は次のように分担し、編集は倉元・樋口・森が行った。

第Ⅰ章～第Ⅲ章 平木場

## 第Ⅳ章

第1節	倉元
第2節	樋口
第3節 土器	倉元
石器	樋口
第V章	森
第VI章	
第1節	樋口
第2節	倉元
第3節	樋口
第4節	森
写真図版	
遺構	樋口
遺物	倉元 樋口

- 17 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という）で保管し、展示・活用を図ることにしている。

## 凡 例

- 1 本報告書掲載の遺構配置図・遺物出土状況図は、1グリッド（1マス）が10m四方であり、各図に縮尺を提示してある。
- 2 遺構
  - (1) 遺構図の縮尺は、堅穴住居跡、堅穴遺構、連穴土坑、土坑、集石、土器集中などを1/20を基本としたが、大型の遺構についてはこの限りではない。
  - (2) 遺構図の断面については、平面図と同縮尺とした。
  - (3) 遺構図中の炭化物の集中域は、スクリーントーンで表現している。
  - (4) 遺構番号については、調査時に付されたものから、報告書掲載順に付け替えた。
- 3 掲載遺物の縮尺は、土器が1/3、石器は石礫などの小型のものを1/1、石斧など中型のものを1/2、裸石器など大型のものを1/3を基本としたが、詳細は各図に提示してある縮尺を参照していただきたい。
- 4 石器の実測表現について、以下のような補助的な表現を行った。  


# 本文目次

卷頭図版1 遺跡遠景（鹿屋方面を望む）	19
卷頭図版2 繩文時代の土器	26
序文	26
報告書抄録	26
平良上C 遺跡位置図	26
例言・凡例	36
目次	38
第I章 発掘調査の経緯	40
第1節 調査に至るまでの経緯	40
第2節 事前調査	48
1 分布調査	48
2 試掘調査	53
第3節 本調査	53
第4節 整理・報告書作成作業	57
1 整理作業	57
2 報告書作成作業	60
第II章 遺跡の位置と環境	63
第1節 地理的環境	63
第2節 歴史的環境	63
第3節 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡	65
第III章 調査の方法と層序	68
第1節 調査の方法	68
1 発掘調査の方法	68
2 遺構の認定と検出方法	71
3 整理・報告書作成作業の方法及び内容	74
第2節 発掘調査の経緯	74
第3節 検出遺構	74
1 墓穴住居跡	74
2 墓穴遺構	77
3 連穴土坑	79
4 土坑	81
5 集石	83
6 土器集中・チップ集中	85
第4節 遺物	85
1 土器	85
2 石器	93
第V章 自然科学分析	97
第1節 自然科学分析の概要	97
第2節 放射性炭素年代	97
第3節 種実同定	99
第4節 テフラ分析	101
第VI章 総括	103
第1節 遺構について	103
第2節 土器について	103
第3節 石器について	105
第4節 噴砂について	105
写真図版	107

# 挿図目次

第1図 年度別調査範囲図	5
第2図 調査範囲図及び試掘トレーニング配置図	6
第3図 遺跡近景（H 26 年度撮影）	8
第4図 周辺地形図	9
第5図 周辺跡跡位置図	11
第6図 東九州自動車道関連遺跡位置図	15
第7図 グリッド配置図	17
第8図 土層断面図1	20
第9図 土層断面図2	21
第10図 土層断面図3	21
第11図 土層断面図4	22
第12図 土層断面図5	23
第13図 土層断面図6	23
第14図 土層断面図7	24
第15図 土層断面図8	25
第16図 遺構配置図	27
第17図 墓穴住居跡・墓穴遺構・連穴土坑配置図	28
第18図 墓穴住居跡1号及び出土遺物1	30
第19図 墓穴住居跡1号出土遺物2	31
第20図 墓穴住居跡2号	33
第21図 墓穴住居跡2号出土遺物	34
第22図 墓穴住居跡3号及び出土遺物	34
第23図 墓穴住居跡4号	35
第24図 墓穴住居跡5号及び出土遺物	36
第25図 墓穴住居跡6号及び出土遺物	37
第26図 墓穴遺構1号	38
第27図 墓穴遺構2号及び出土遺物	39
第28図 連穴土坑1号及び出土遺物	40
第29図 連穴土坑2号・3号	41
第30図 土坑配置図	43
第31図 土坑1(Ⅰ類)及び出土遺物	44
第32図 土坑2(Ⅰ類)及び出土遺物	46
第33図 土坑3(Ⅱ類①)及び出土遺物	47
第34図 土坑4(Ⅱ類②)及び出土遺物	48

第 35 図	土坑 5 (Ⅲ類) 及び出土遺物	49	第 83 図	VI類土器 9	107
第 36 図	集石配置図	50	第 84 図	VI類土器 10	108
第 37 図	集石 I-a 類①及び出土遺物	52	第 85 図	VI類土器 11	109
第 38 図	集石 I-a 類②及び出土遺物	53	第 86 図	VI類土器 12	110
第 39 図	集石 I-a 類③及び出土遺物	55	第 87 図	VI類土器 13	111
第 40 図	集石 I-a 類④及び出土遺物	56	第 88 図	VI類土器 14	112
第 41 図	集石 I-b 類①及び出土遺物	57	第 89 図	VII類土器出土分布図	114
第 42 図	集石 I-b 類②及び出土遺物	58	第 90 図	VII類土器 1	115
第 43 図	集石 I-b 類③及び出土遺物	60	第 91 図	VII類土器 2	116
第 44 図	集石 II-a 類①	61	第 92 図	VII類土器 3	117
第 45 図	集石 II-a 類②及び出土遺物	62	第 93 図	VII類土器出土分布図	118
第 46 図	集石 II-b 類①及び出土遺物	63	第 94 図	VII類土器 1	119
第 47 図	集石 II-b 類②及び出土遺物	64	第 95 図	VII類土器 2	120
第 48 図	集石 II-b 類③及び出土遺物	65	第 96 図	IX類土器出土分布図	121
第 49 図	集石 II-b 類④及び出土遺物	66	第 97 図	IX類土器	122
第 50 図	集石 II-c 類①	67	第 98 図	X類土器出土分布図	124
第 51 図	集石 27 号出土遺物	70	第 99 図	X類土器 1	125
第 52 図	集石 II-c 類②及び出土遺物	71	第 100 図	X類土器 2	126
第 53 図	集石 II-c 類③及び出土遺物	72	第 101 図	X類土器 3	127
第 54 図	集石 II-c 類④及び出土遺物	73	第 102 図	X類土器 4	128
第 55 図	土器集中及び出土遺物	74	第 103 図	X類土器 5	129
第 56 図	チップ集中及び位置図	75	第 104 図	XI・XII類土器出土分布図	130
第 57 図	全土器出土分布図	79	第 105 図	XI・XII類土器	131
第 58 図	I・II類土器出土分布図	80	第 106 図	XIII類土器出土分布図	132
第 59 図	I・II類土器	81	第 107 図	XIV類土器出土分布図	133
第 60 図	II類土器 1	82	第 108 図	XIV類土器	134
第 61 図	II類土器 2	83	第 109 図	XV・XVI類土器	135
第 62 図	III類土器出土分布図	84	第 110 図	XV類土器出土分布図	136
第 63 図	III類土器	85	第 111 図	XV類土器 1	137
第 64 図	IV類土器出土分布図	88	第 112 図	XV類土器 2	138
第 65 図	IV類土器 1	89	第 113 図	縄文時代早期の剥片石器出土分布図	148
第 66 図	IV類土器 2	90	第 114 図	縄文時代の石器 1	149
第 67 図	IV類土器 3	91	第 115 図	黒曜石 (桑ノ木津留) 出土分布図	150
第 68 図	IV類土器 4	92	第 116 国	黒曜石 (針尾) 出土分布図	151
第 69 国	IV類土器 5	93	第 117 国	黒曜石 (日東) 出土分布図	152
第 70 国	IV類土器 6	94	第 118 国	黒曜石 (腰岳) 出土分布図	152
第 71 国	V類土器出土分布図	95	第 119 国	黒曜石 (三船) 出土分布図	152
第 72 国	V類土器	96	第 120 国	縄文時代の石器 2	153
第 73 国	VI類土器出土分布図	97	第 121 国	縄文時代の石器 3	154
第 74 国	VI類土器出土分布図 (掲載分)	98	第 122 国	縄文時代の石器 4	155
第 75 国	VI類土器 1	99	第 123 国	縄文時代の石器 5	156
第 76 国	VI類土器 2	100	第 124 国	縄文時代の石器 6	157
第 77 国	VI類土器 3	101	第 125 国	縄文時代の石器 7	158
第 78 国	VI類土器 4	102	第 126 国	縄文時代の石器 8	159
第 79 国	VI類土器 5	103	第 127 国	縄文時代の石器 9	160
第 80 国	VI類土器 6	104	第 128 国	縄文時代の石器 10	161
第 81 国	VI類土器 7	105	第 129 国	縄文時代の石器 11	162
第 82 国	VI類土器 8	106	第 130 国	縄文時代の石器 12	163

第 131 図	縄文時代の石器 13	164
第 132 図	縄文時代の石器 14	165
第 133 図	縄文時代の石器 15	166
第 134 図	縄文時代早期の礫石器出土分布図	167
第 135 図	縄文時代の石器 16	168
第 136 図	縄文時代の石器 17	169
第 137 図	縄文時代の石器 18	170
第 138 図	縄文時代の石器 19	171
第 139 図	縄文時代の石器 20	172
第 140 図	縄文時代の石器 21	173
第 141 図	縄文時代の石器 22	174
第 142 図	縄文時代の石器 23	175
第 143 図	縄文時代の石器 24	176
第 144 図	縄文時代の石器 25	177
第 145 図	縄文時代の石器 26	178
第 146 図	縄文時代の石器 27	179
第 147 図	縄文時代の石器 28	180
第 148 図	縄文時代の石器 29	181
第 149 図	縄文時代の石器 30	182
第 150 図	炭化鱗茎	192
第 151 図	重鉱物組成および火山ガラス比	194
第 152 図	火山ガラスの屈折率	195
第 153 図	斜方輝石の屈折率 1	196
第 154 図	斜方輝石の屈折率 2	197
第 155 図	重鉱物・火山ガラス	198
第 156 図	IV類土器接合状況図	201
第 157 図	VI類土器接合状況図	202
第 158 図	VI類土器接合状況図（断面）	202
第 159 図	VII類土器接合状況図	203
第 160 図	VI・VII類土器出土状況図	203

## 表目次

第 1 表	周辺遺跡一覧表	12
第 2 表	志布志IC～鹿屋串良JCT 間の遺跡	13
第 3 表	平良上 C 遺跡の基本土層	19
第 4 表	遺構内出土土器観察表 1	75
第 5 表	遺構内出土土器観察表 2	76
第 6 表	遺構内出土土器観察表 3	77
第 7 表	遺構内出土石器観察表	77
第 8 表	I・II類土器観察表	139
第 9 表	III類土器観察表	140
第 10 表	IV類土器観察表 1	140
第 11 表	IV類土器観察表 2	141
第 12 表	V類土器観察表	141
第 13 表	VI類土器観察表 1	141
第 14 表	VI類土器観察表 2	142
第 15 表	VI類土器観察表 3	143
第 16 表	VI類土器観察表 4	144
第 17 表	VII類土器観察表 1	144
第 18 表	VII類土器観察表 2	145
第 19 表	VII類土器観察表	145
第 20 表	IX類土器観察表 1	145
第 21 表	IX類土器観察表 2	146
第 22 表	X類土器観察表	146
第 23 表	XI・XII類土器観察表	146
第 24 表	XIII類土器観察表 1	146
第 25 表	XIII類土器観察表 2	147
第 26 表	XIV類土器観察表	147
第 27 表	XV類土器観察表	147
第 28 表	縄文時代の石器観察表 1	183
第 29 表	縄文時代の石器観察表 2	184
第 30 表	縄文時代の石器観察表 3	185
第 31 表	縄文時代の石器観察表 4	186
第 32 表	放射性炭素年代測定結果	188
第 33 表	放射性炭素年代測定結果（1）	188
第 34 表	放射性炭素年代測定結果（2）	189
第 35 表	炭化種実同定結果	191
第 36 表	テフラ組成分析試料一覧	193
第 37 表	テフラ組成分析結果	194
第 38 表	土器出土割合	200

# 図版目次

## 巻頭図版

巻頭図版1 遺跡遠景（鹿屋方面を望む）

巻頭図版2 繩文時代の土器

## 巻末図版

図版1 遺跡遠景（志布志方面を望む）	205
図版2 土層断面ほか	206
①～③土層断面	④遺物出土状況
⑤遺構検出状況	⑥作業風景
⑦現地指導	
図版3 墓穴住居跡1号	207
①遺物出土状況	②検出状況
③埋土状況	④⑤完掘状況
図版4 墓穴住居跡2号	208
①検出状況	②埋土状況（全体）
③作業風景	④埋土状況
⑤完掘状況	⑥遺跡遠景
図版5 墓穴住居跡3号・4号	209
①検出状況	②埋土状況
③3号遺物出土状況	
④4号遺物出土状況	⑤完掘状況
図版6 墓穴住居跡5号・6号	210
①5号検出状況	②5号埋土状況
③5号完掘状況	④6号検出状況
⑤6号埋土状況	⑥6号完掘状況
図版7 墓穴遺構1号・2号	211
①1号・2号検出状況	②1号検出状況
③1号埋土状況	④1号完掘状況
⑤2号検出状況	⑥⑦2号埋土状況
⑧2号完掘状況	
図版8 連穴土坑1号	212
①検出状況	②埋土状況
③④④完掘状況	
図版9 連穴土坑2号・3号	213
①2号・3号検出状況	
②2号・3号埋土状況	
③2号・3号完掘状況	
④1～3号（手前2号・3号、奥1号）	
図版10 土坑検出状況	214
①1号土坑埋土状況	
②2号土坑検出状況	
③④3号土坑埋土・完掘状況	
⑤⑥8号土坑埋土・完掘状況	
⑦⑧13号土坑埋土・完掘状況	
図版11 集石（1）	215
①②集石2号検出状況	
③集石2号埋土状況	

④集石2号完掘状況	
⑤集石1号検出状況	
図版12 集石（2）	216
①集石3号	②集石4号
③集石5号	④集石6号
⑤⑥⑦集石9号検出・埋土状況	
⑧集石11号	
図版13 集石（3）	217
①②集石14号	③集石15号
④集石16号	⑤集石17号
⑥集石18号	
図版14 集石（4）	218
①集石19号	②集石20号
③集石21号	
④集石22号	⑤集石23号
⑥集石24号	
⑦集石25号	⑧集石26号
図版15 集石（5）	219
①集石27号	②集石28号
③集石29号	
④集石30号	⑤集石31号
⑥集石32号	
⑦集石33号	⑧集石34号
図版16 遺構内出土遺物（1）	220
図版17 遺構内出土遺物（2）	221
図版18 I・II類土器	222
図版19 III・IV・V類土器	223
図版20 IV類土器	224
図版21 VI類土器（1）	225
図版22 VI類土器（2）	226
図版23 VI類土器（3）	227
図版24 VI類土器（4）	228
図版25 VI類土器（5）	229
図版26 VII類土器	230
図版27 VIII・IX類土器	231
図版28 X類土器（1）	232
図版29 X類土器（2）	233
図版30 XI・XII類土器	234
図版31 XIII・XIV類土器	235
図版32 XV類土器	236
図版33 繩文時代の石器1	237
図版34 繩文時代の石器2	238
図版35 繩文時代の石器3	239
図版36 繩文時代の石器4	240
図版37 繩文時代の石器5	241
図版38 繩文時代の石器6	242

# 第Ⅰ章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経緯

県教委は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公团九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志 IC～末吉財部 IC 間の事業の実施に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）に照会した。

この照会に伴い文化財課は、平成 11 年 1 月に鹿屋串良 JCT～末吉財部 IC 間を、平成 12 年 2 月には志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50 か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間に内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公团九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道路対策室、文化財課、県埋文センターの 4 者で協議を重ね対応を検討している最中に日本道路公团民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。

このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の徹密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査、試掘調査、確認調査が実施されることとなった。

そこで、県教委は、平成 13 年 1 月 29 日から平成 13 年 2 月 6 日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡、加治木塙遺跡、石縫遺跡、十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに、平成 13 年 7 月 10 日から 7 月 26 日に鹿屋串良 JCT～末吉財部 IC 間の工事計画図とともに 33 の遺跡について詳細分布調査と、平成 13 年 9 月 17 日～10 月 26 日、平成 13 年 12 月 3 日～12 月 25 日の 2 期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて、既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり、閑山西遺跡、閑山遺跡、狩俣遺跡の 3 遺跡を対象に平成 13 年 10 月 1 日から平成 14 年 3 月 22 日にかけて確認調査を実施した。

平成 14 年 4 月には、志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間の遺跡について再度分布調査を実施した。

その後、日本道路公团民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の開業決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成 15 年 11 月に暫定 2 車線施行に伴う調査確認書締結、同年 12 月に大隅 IC（平成 21 年 4 月 28 日、「曾於弥五郎 IC」へ名称変更）から末吉財部 IC 間の発掘調査協定書締結、平成 16 年 3 月に国土交通省九州地方整

備局長、日本道路公团九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が行われ、工事は日本道路公团が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公团が鹿児島県に委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま継続するということになった。ただし、日本道路公团からの委託は曾於弥五郎 IC までで終了し、曾於弥五郎 IC からの先線部は国土交通省からの受託事業となつた。

平成 24 年度、国土交通省は、平成 25 年度から東九州自動車道（志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間）の建設工事をさらに推進する意向を示し、発掘調査期間の短縮を要請してきた。

このような状況に対応するため、県は関係機関で協議を重ね、職員確保や予算運用が柔軟にでき、発掘調査を円滑かつ効率的に実施できる財團の設置を決定した。

これを受けて、平成 25 年 4 月、公益財团法人鹿児島県文化振興財團に埋文調査センターを設置し、国事業に関する業務を県文化振興財團へ委託し、県埋文センターから業務を引き継ぎ実施することとなつた。

平良上 C 遺跡の調査は、試掘調査を文化財課・県埋文センターが、大崎町教育委員会の協力、国土交通省九州地方整備局の立ち会いのもとを行つた。本調査については、埋文調査センターが行つた。

調査経過は、以下のとおりである。

## 発掘調査

(1) 分布調査：平成 14 年 4 月

(2) 試掘調査

第 1 回 平成 25 年 1 月 8 日

第 2 回 平成 25 年 12 月 12 日

第 3 回 平成 26 年 1 月 23 日

(3) 本調査

第 1 回 平成 26 年 11 月 4 日～平成 27 年 3 月 10 日

第 2 回 平成 27 年 7 月 13 日～平成 27 年 8 月 21 日

## 整理・報告書作成作業

(1) 整理作業

平成 27 年 4 月 13 日～平成 28 年 3 月 4 日

(2) 整理・報告書作成

平成 28 年 4 月 14 日～平成 29 年 3 月 3 日

なお、各調査の調査体制等詳細については次節以降で報告することとする。

## 第2節 事前調査

### 1 分布調査

平良上C遺跡の分布調査は、日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡について依頼を受け、平成14年4月に実施した。

### 2 試掘調査

試掘調査は、平成14年度の分布調査の結果を受けて、より詳細な包含層等の状況を確認するため、平成25年1月8日に用地解決試済箇所の試掘調査を行った。その後、用地問題が解決し、条件の整った箇所について、同年12月12日及び翌年1月23日に再度試掘調査を行った。

調査方法は、遺跡内にトレントを設定し、重機を使用しながら掘り下げを行った。地層、遺構や遺物の有無の確認を行いながら掘り下げた。調査の結果、2～4・8・9トレントでは良好な縄文時代早期の遺物包含層が確認された。当初、弥生・古墳時代の遺跡として周知されていたため、古墳時代の遺物包含層の有無も確認したが、明確な層は確認できなかった。

試掘調査の調査体制は次のとおりである。

### 調査体制（平成24年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査担当 中村和美  
立会者 国土交通省九州地方整備局

大隅河川国道事務所調査第三課

専門職 杉田正文

大崎町教育委員会社会教育課

主査 内村憲和

### 調査体制（平成25年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査担当 中村和美  
鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 国本貢一

文化財研究員 今村結記

立会者 国土交通省九州地方整備局

大隅河川国道事務所調査第三課

係長 弓削琢磨

大崎町教育委員会社会教育課

係長 内村憲和

## 第3節 本調査

本調査は平成26、27年度の2か年にわたり実施した。各年度の調査体制及び調査の詳細（日誌抄より）については次のとおりである。

### 調査体制（平成26年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財團

埋蔵文化財調査センター

セントラル長 堂込秀人

調査企画 \* 総務課長兼総務係長 山方直幸

\* 調査課長 八木澤一郎

\* 調査第一係長 中村和美

調査担当 \* 文化財専門員 平木場秀男

\* タ 大岩本博之

\* 文化財調査員 下田代清海

\* タ 稲垣友裕

\* タ 勝田裕介

事務担当 \* 主査 岡村信吾

現地指導 鹿児島県立武岡台高等学校教諭 成尾英仁

### 調査の詳細（日誌抄より）

#### 【10月】

調査区伐採作業、進入路整備、營繕用地・駐車場整地作業、電気・水道引き込みなどの環境整備。

B～F - 11～13区、B～F - 15～19区、重機による表土剥ぎ及びII～VI層の掘り下げ。

#### 【11月】

環境整備、グリッドベルト設定、調査範囲図作成  
B～F - 11～13区 VI層・VII層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、写真撮影、集石、土器集中の調査）。

調査区西側の斜面から大量の遺物が出土し、調査区外へ遺跡の範囲が広がる可能性が出てきたため、C～E - 9・10区まで調査範囲を拡張し表土剥ぎを行った。

D・E - 14～19区、B～D - 15～18区 VI層・VII層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、写真撮影、集石、土器集中の調査）。

E・F - 14・15区の一部は、現代の烟造成のため削平されており、遺物包含層が無いところも見られた。下層確認のため掘り下げを行ったが、遺構・遺物とも確認されなかった。

大量の遺物の取り上げを迅速に行い、速やかに遺構検出作業に移行するため、遺構実測支援システムを導入した。これにより遺物取り上げの迅速化を図った。



## 【1月】

遺構実測を円滑に進め調査の効率を高めるため、集石の遺構実測を一部委託した。

C～F - 9～11 区VI層・VII層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、写真撮影、集石の調査）。

B～F - 12・13 区Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、写真撮影、集石の調査）。

遺構配図作成、土層断面実測、コンタ図作成  
調査区西側の拡張部の掘り下げを行ったが、包含層が厚く堆積し、遺物が大量に出土した。台地の尾根に近い11・12・13区では、谷を取り巻くように多くの集石が検出され、集石に伴う散縄が全体に出土した。斜面の傾斜が大きくなつたので、通路の確保などの安全対策を入念に行つた。

B～F - 13・14 区表土剥ぎ、VI層・VII層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、写真撮影、集石の調査）。

C～F - 14～19 区VI層・VII層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、写真撮影、集石、土器集中の調査）。遺構配図作成、コンタ図作成

## 【1月】

試掘調査の結果よりも包含層が厚く堆積し、想定よりも遺構・遺物が大量に確認され、調査区が広がつたため、発掘作業員を増員し調査を進めた。

B・C - 9～11 区表土剥ぎ、VI層・VII層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出）。

C～F - 9～11 区VI層・VII層の調査（掘り下げ、遺物取上、土層断面実測、集石の調査）。

B～F - 12・13 区Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、写真撮影、集石の調査）。

遺構配図作成、土層断面実測、コンタ図作成  
調査区西側の掘り下げを引き続き行つたが、包含層が厚く堆積し、一部に層位の逆転が見られるほどVII層・VIII層が混在していた。遺物は引き続き大量に出土していたが、Ⅷ層上面まで掘り下げを進め遺構検出を行つた。土

層断面観察用のベルトを設定できなかつたので、西側へ向かって徐々に深くなる斜面の南北壁面を実測した。最深部の地表からの深さは、3mを超えた。

B～F - 13～19 区VI層・VII層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、写真撮影、集石、土坑、土器集中の調査）。

B～F - 20・21 区表土剥ぎ、VI層・VII層の調査（掘り下げ、遺物取上）。

遺構配置図作成、コンタ図作成

15・16 区付近からは、多くの集石が尾根を囲むように検出された。E・F - 15・16 区では、緩やかに東側へ下る平坦面から土坑（径1～1.5m）が10基程度まとめて見つかった。また、D・21 区には電柱が残つておらず、電柱に影響のある部分以外の表土剥ぎを行つた。電柱下の未検査部分については、撤去後改めて調査を実施することとした。

## 【2月】

B・C - 9～11 区VI層・VII層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、集石の調査）。

C～F - 9～13 区Ⅷ層の調査（遺構検出、写真撮影、集石の調査）。

B～F - 13 区下層確認トレンチ設定及び掘り下げ

遺構配置図作成、土層断面実測、全体コンタ図作成

調査区西側については、一部の遺構実測、土層断面実測を残して、Ⅷ層上面までの調査が終了した。旧石器時代の包含層の有無を確認するため、南北方向にトレントを設定し掘り下げを行つたが、遺構・遺物は確認されなかつた。

C・D - 15・16 区Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。

C～F - 17～20 区Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、写真撮影、土坑、堅穴住居跡、連穴土坑の調査）。

E・F - 15～20 区Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、写真撮影、集石、土坑、土器集中の調査）。

遺構配置図作成、土層断面実測

調査区東側の平坦面では、尾根に近い15・16 区付近で多かった集石はほぼ見られなくなり、遺物の出土量もかなり少なくなつてきた。代わりに18～20 区にかけて隅丸方形を呈した堅穴住居跡や連穴土坑などの集落を連想させる遺構が検出された。

本遺跡では、遺跡全体に鬼界カルデラの噴火の際の地震による液状化現象で生じた噴砂が見つかつておらず、噴砂の確認や遺構・遺物に与えた影響などを検討するため、成尾英仁氏（県立武岡台高等学校教諭）に現地指導を依頼した。

## 【3月】

B・C - 10～13 区Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、

遺構検出、集石の調査)。

遺構配置図作成、土層断面実測、コンタ図作成

残っていた遺構実測が終わり調査が終了した。土層断面実測後、西端の谷部については安全対策及び排水板置き場として活用するため一部埋め戻しを行った。

B・C - 19・20 区Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出）。

C・D - 17~20 区Ⅷ層の調査（住居跡、土坑の調査）。

E・F - 17~20 区Ⅸ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、写真撮影、連穴土坑の調査）。

遺構配置図作成、土層断面実測、全体コンタ図作成

東側の調査区外に試掘トレンチを設定（11・12トレンチ）。重機を使用しながら掘り下げを行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

緩やかに東側へ下る平坦面では、調査区東端付近でも堅穴住居跡などの遺構が見つかり、東側の調査区外へ広がる可能性が大きくなってきた。電柱下の未調査部分を含め拡張した調査範囲を設定し、来年度発掘調査を実施することとして本年度の調査を終了した。その際、埋め戻しは行わず立ち入り禁止看板、丸太枕、ロープなどを使って安全対策を施した。

最後に周辺地形を取り入れた本遺跡の全景を上空から撮影するため、空中写真撮影を実施した。

#### 調査体制（平成 27 年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育府文化財課

調査統括 公益財團法人鹿児島県文化振興財團  
埋蔵文化財調査センター

センター長 堂込秀人

調査企画 シ 総務課長兼総務係長 有村 貢  
シ 調査課長 八木澤一郎  
シ 調査第一係長 中村和美

調査担当 シ 文化財専門員 平木場秀男  
シ 文化財調査員 稲垣友裕

事務担当 シ 主査 荒瀬勝己

#### 調査の詳細（日誌抄より）

##### 【7月】

調査区・進入路・營繕用地・駐車場除草作業、電気・水道引き込みなどの環境整備。

B~F - 20・21 区の未調査部分及び拡張部について、重機による表土剥ぎ及びⅡ~Ⅵ層の掘り下げ。

環境整備、調査範囲図作成

B~E - 20・21 区Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構検出、写真撮影、堅穴住居跡、土坑の調査）。

遺構配置図作成、土層断面実測、全体コンタ図作成

昨年度の調査区に隣接した電柱、道路下部分の狭い調査区であり、加えて地形全体が東側へ緩やかに傾斜した平坦面のため、大雨のたびに調査区が水没するなど難しい調査となつた。排水ポンプの活用や重機による無遺物層の掘り下げなど、工夫しながら調査を実施した。

遺物の出土は少なかつたが、新たな堅穴住居跡や土坑が検出された。特に堅穴住居跡 4 号は、調査区境からの発見であったので、B~D - 21・22 区の隣接地をさらに拡張し遺跡の広がりを確認することとなつた。調査期間も 7 月の 1 ヶ月間の予定であったが、8 月初旬まで延長して対応した。調査の結果、堅穴住居跡 2~4 号より東側に新たな遺構・遺物は発見されなかつた。

#### 【8月】

B~D - 21 区Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、写真撮影、堅穴住居跡、土坑、集石の調査）。

遺構配置図作成、土層断面実測、全体コンタ図作成

今年度の調査では、拡張部分の遺構・遺物の他にも、安全対策上掘り下げを行わなかつた南北の調査区境や階段下など再度遺構検出を行い、H26 年度調査区内で新たに発見された遺構についても調査を行つた。

調査終了後、安全対策上必要と思われる東端の段差について一部埋め戻しを行い国土交通省へ引き渡した。

#### 第4節 整理・報告書作成作業

報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成 27 年度から発掘調査作業と並行して実施した。

平成 27 年度は整理作業を、平成 28 年度は報告書刊行へ向けた作業を公益財團法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター第一整理作業所で実施した。

作業内容は、以下のとおりである。

##### 1 整理作業

###### (1) 遺構

実測図と図面台帳との照合、遺構別に実測図の仕分け、注記の確認、トレースへ向けての下図面作成等

###### (2) 遺物

###### ア 土器・石器共通

水洗い、遺構内出土遺物と包含層出土遺物との仕分け、遺物と遺物台帳や遺構実測図との照合

###### イ 土器

注記、分類、接合、実測する土器の選別

###### ウ 石器

石器と一般礫の仕分け、分類、実測する石器の選別

### 作成体制（平成 27 年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団

埋蔵文化財調査センター

センター長 堂込秀人

調査企画 タ 総務課長兼総務係長 有村 貢

タ 調査課長 八木澤一郎

タ 調査第一係長 中村和美

調査担当 タ 文化財専門員 平木場秀男

タ 真方敏行

タ 文化財調査員 森えりこ

事務担当 タ 主査 荒瀬勝己

遺物指導 南九州縄文研究会 新東晃一

### 2 報告書作成作業

- (1) 遺構図のペントレースやデジタルトレース、遺構配置図の作成、報告書掲載用写真選別、原稿執筆
- (2) 土器の実測、拓本、トレース、レイアウト、観察表作成、原稿執筆、遺物分布図作成、報告書掲載用写真撮影
- (3) 石器の実測及び実測委託、トレース、レイアウト、観察表作成、原稿執筆、遺物分布図作成、報告書掲載用写真撮影

縄文時代早期の土器については南九州縄文研究会の新東晃一氏に、石器については長野眞一氏に指導をいただいた。

整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

### 作成体制（平成 28 年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団

埋蔵文化財調査センター

センター長 堂込秀人

調査企画 タ 総務課長兼総務係長 有村 貢

タ 調査課長 八木澤一郎

タ 調査第一係長 中村和美

調査担当 タ 文化財専門員 倉元良文

タ 文化財調査員 稲垣友裕

タ 桶口めぐみ

タ 森えりこ

事務担当 タ 主査 荒瀬勝己

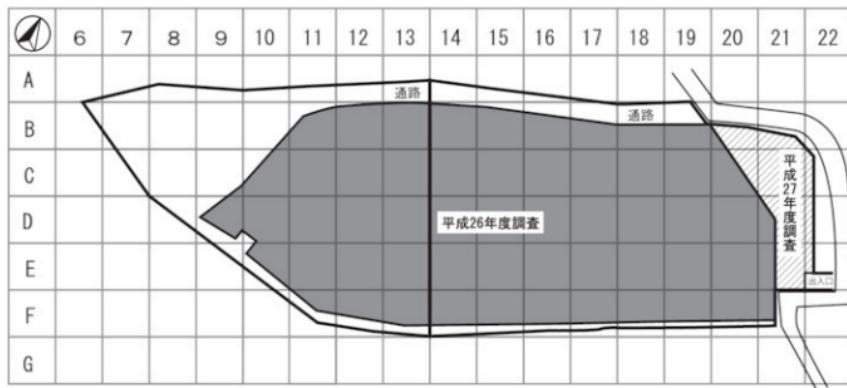
遺物指導 長野眞一

報告書作成指導委員会 平成 28 年 11 月 25 日実施

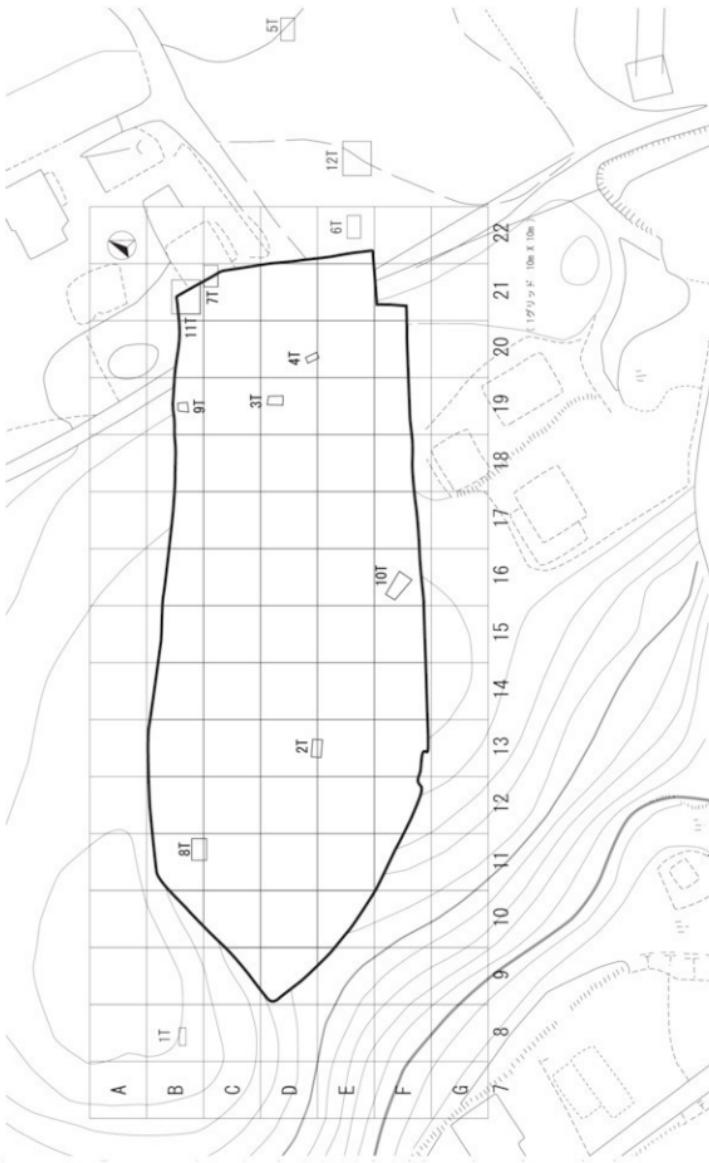
八木澤課長は 7 名

報告書作成指導委員会 平成 28 年 11 月 28 日実施

堂込センター長は 6 名



第1図 年度別調査範囲図



第2図 調査範囲図及び試掘トレンチ配置図

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

平良上C遺跡は、曾於郡大崎町井俣に所在する。大崎町は鹿児島県の東部を形成する大隅半島の中央部東側に位置し、東西に約8km、南北に約18kmの範囲にあり、総面積は100.82km<sup>2</sup>である。東側に志布志市、西側に鹿屋市、南側に肝属郡東串良町、北側に曾於市と接し、南部では黒瀬の流れる志布志湾に面している。

大隅半島の地形は九州山地の延長をなす東西の山地と、その間の丘陵、台地及び低地などの低地帯から形成されている。東側の山地は、志布志北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山地ともいう）である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で中生層の地層からなっている。西側の山地は、北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は北部の白岳・荒磯岳など500~600m級の山々と、南部の大蛇柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で、山容は急峻で深い森林に覆われている。

地質は、高隈山周辺に分布している新生代古第3紀の日南層群によって大隅半島の基盤をなしている。山地間に埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は、堆積後現在に至るまで大小多くの河川で開析されている。大隅半島中央部の地形は、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地で形成されている。一方、低地は高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が走り、志布志湾、鹿児島湾などに注いでいる。この河川は上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また何段かの河岸段丘も認められる。

大崎町の地形は志布志面に面した大崎地区と、内陸部に位置する野方地区的二つの地区が南北に連結する瓢箪状を呈する。南部は、海岸線に向かい緩やかな傾斜をなす起伏が少ない平坦な地形である。北部は標高150mから200mの丘陵地帯であり、北端部では谷間の多い起伏の激しい地形である。高隈山系などに端を発する菱田川、田原川、持留川の三つの川が南流し、志布志湾に注いでいる。南部は、この3河川によってシラス台地が開析された水田地帯がひらけている。北部は、台地上に畑地が形成されている。地質はシラス台地上に形成された黒色火山灰土層が多く、低地部に位置する水田の一部で

は泥炭層をなしているところがある。

平良上C遺跡は南部に広がる平坦なシラス台地を南北に開析する田原川左岸の台地上に位置し、田原川と志布志市有明町を流れる菱田川に挟まれたシラス台地の最西端にある。田原川と菱田川の間は「菱田原」と称され、標高は約40mである。遺跡は小高い丘を境に東側は緩やかに下る平坦面、西側は田原川周辺の低地へ向かって急激に下る谷地形を呈し、段丘の崖へと続いている。台地と田原川周辺の低地との標高差は、約25mである。

周辺には、同じ台地上の西側に平良上A遺跡、北側に平良上B遺跡、田原川を挟んだ対岸の台地上に坂上遺跡・柿木遺跡、同じ東九州自動車道建設に伴う発掘調査を実施した宮脇遺跡・荒園遺跡などの遺跡が点在する。

### 第2節 歴史的環境

平良上C遺跡の所在する大崎町では、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。また近年、大崎町や東九州自動車道建設に伴う発掘調査の成果などから、次第にその様相が明らかになりつつある。東九州自動車道建設に伴う発掘調査の成果は次節で記載し、ここではそれ以外の成果をまとめることとする。

#### 旧石器時代

天神段遺跡から、ナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器作製跡及び石器類が検出・出土している。

#### 縄文時代

近年、町内において、縄文時代の遺跡の発掘調査が増えつつある。金丸城跡から石坂式土器・石錐・凹石、二子塚A遺跡から塞ノ神式土器・落とし穴状造構2基、下堀遺跡からは前平式土器・石坂式土器・下削峯式土器・手向山式土器・平橋式土器・集石13基が発見され、遺構は確認されていないが指宿式土器を中心とする後期土器も出土している。立山B遺跡から曾畠式土器・阿高式土器・黒川式土器、大崎細山田段遺跡から西平式土器が出土している。

#### 弥生時代

名勝「くにの松原」の砂丘後背地に立地する沢目遺跡は、砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成11年の町教育委員会による発掘調査では、住居跡53軒・約20基の土坑・約180基の柱穴が発見されており、入来I式土器・入来II式土器・山ノ口I式土器・山ノ口II式土器・須玖式土器・鉄製品・輕石製加工品が出土している。下堀遺跡からは山ノ口II式土器のほか、



第3図 遺跡近景（H26年度撮影）



第4図 周辺地形図

須玖式土器を伴う直径 8 m の円形大型住居跡 2 軒・掘立柱建物跡 5 棟が検出されている。麦田下遺跡からは土器溝りが検出されており、高付式土器・西南四国系土器・瀬戸内系土器など、攝入品や模倣品を含む外來系の土器が多く出土している。田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し、特に河口付近に近い横瀬地域では甕棺破片が採集されている。

#### 古墳時代

大崎町とその周辺の志布志清治いは、南九州では数少ない前方後円墳をはじめとした古墳群を有し、畿内との関連をうかがわせる。

横瀬古墳は古墳時代中期（5世紀前半）の前方後円墳で、隣接する肝属郡東申良町の唐仁大塚古墳に次いで県内第二の規模を誇る。平成 2 年の鹿児島大学と琉球大学の測量調査では、全長 160m、墳長 132m、前方部幅 72m、前方部長 68m、後円部径 64m、くびれ部幅 48m を測る。なお、周溝の幅は 12~23m、深さは 1.5m である。墳丘の高さについては、後円部が 10.5m、前方部が 11.5m であるが、後円部の墳上部に石室が露呈していることから、もともとの後円部は現在より高かったと考えられる。平成 22~23 年に町が行った範囲確認調査では、これまで確認されていた周溝の北側と南側の外側にさらに廻らされている約 4 m の周溝が確認された。新たに発見された外溝までを範囲とすれば、全長は約 180m に及ぶ。昭和 53 年に県が行った範囲確認調査では、周溝から伽耶系陶質土器及び大阪府陶邑産の須恵器が出土し、墳丘からは円筒埴輪片、形象埴輪片が出土している。被葬者については明らかにされていないが、明治 35 年に盃掘を受け、その際に軽食した直刀や甲冑、勾玉類が出土し、堅式穴石室内は朱塗りであったと伝えられ、被葬者の実力をうかがわせる。

神領古墳群は前方後円墳 4 基・円墳 9 基で構成され、地下式横穴墓 8 基の存在も知られている。前方後円墳の 6 号墳（天子ヶ丘古墳）は昭和 37 年に日光鏡・彷彿獸帶鏡（各 1 面）が採集され、昭和 43 年の発掘調査では、石室は花崗岩質板石 6 枚を使用した箱式石棺で、鉄劍・鉄刀・鏡等の副葬品が確認された。また、平成 18~20 年にかけて鹿児島大学総合研究博物館による前方後円墳 10 号墳の調査が行われ、全長約 50m、周溝に 4 基の地下式横穴墓が存在することが判明した。また、周溝からは盾持人埴輪、くびれ部からは初期須恵器を大量に含む祭祀土器群が出土した。後円部墳頂で溶結凝灰岩製の剝抜式舟形石棺や鉄劍・甲冑・鐵鏡東などが発見された。昭和 35 年に調査された地下式横穴墓 1 号は、長方形で家形の玄室、妻入りの渡道部取り付け、鉄劍・イモガイ製貝鏡、内向花文鏡などの副葬品が確認され、昭和 62 年に調査された地下式横穴墓 5 号からも、イモガイ製貝鏡が確認された。平成 2 年に調査された地下式横穴墓 6 号は、玄

室内には南側に齒が数本、北側に大腿骨が残存していたが、副葬品は確認できなかった。

町内では他に、高塚古墳として飯隈古墳群・田中古墳群・後追古墳群が知られ、地下式横穴墓として飯隈地下式横穴墓群・鷺塚地下式横穴墓群が知られている。

この他にも、二子塚遺跡 A で住居跡・土師器・成川式土器、沢木遺跡で住居跡・溝状遺構・地下式横穴墓・鉄劍・鉄鏡が確認されている。

#### 古代・中世

古代の遺跡としては、天神段遺跡で古代の掘立柱建物跡が確認されている。また、下堀遺跡では土師器と土坑が確認されている。

中世の遺跡はほとんどが山城であり、大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野鶴城跡・竜相城跡・金丸城跡・椿谷城・遠見ヶ丘があげられる。金丸城跡からは溝状遺構・土坑・龍泉窯系及び同安窯系の青磁・東播系須恵器・白磁・青花・瓦質土器・備前焼鉢・天目碗などが確認されている。下堀遺跡からは溝状遺構・歎跡・青磁・青花・中国陶器などが確認されている。天神段遺跡からは掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓・土坑・土師器・須恵器・青磁・白磁・天目碗・鉄製品・青銅製品・鉄滓・砾石・滑石製石鍋片などが確認されている。中でも土坑墓 1 号からは、同安窯系青磁 6 点・青磁 1 点・青白磁 1 点・銅鏡 1 点・滑石製石鍋 2 点・鉄製品・木製品・土師器などの副葬品が確認されている。

#### 近世

金丸城跡からは環状に配列する掘立柱建物跡・焼土を伴う土坑・輕石集積区・肥前系染付・龍門司窯及び苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓などが確認されている。天神段遺跡からは安永ボラ（1779 年）を埋土とする歎状遺構や薩摩焼などが確認されている。

#### 引用参考文献

大崎町 1975 「大崎町史（明治百年）」

大崎町教育委員会 2005 「金丸城跡」 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

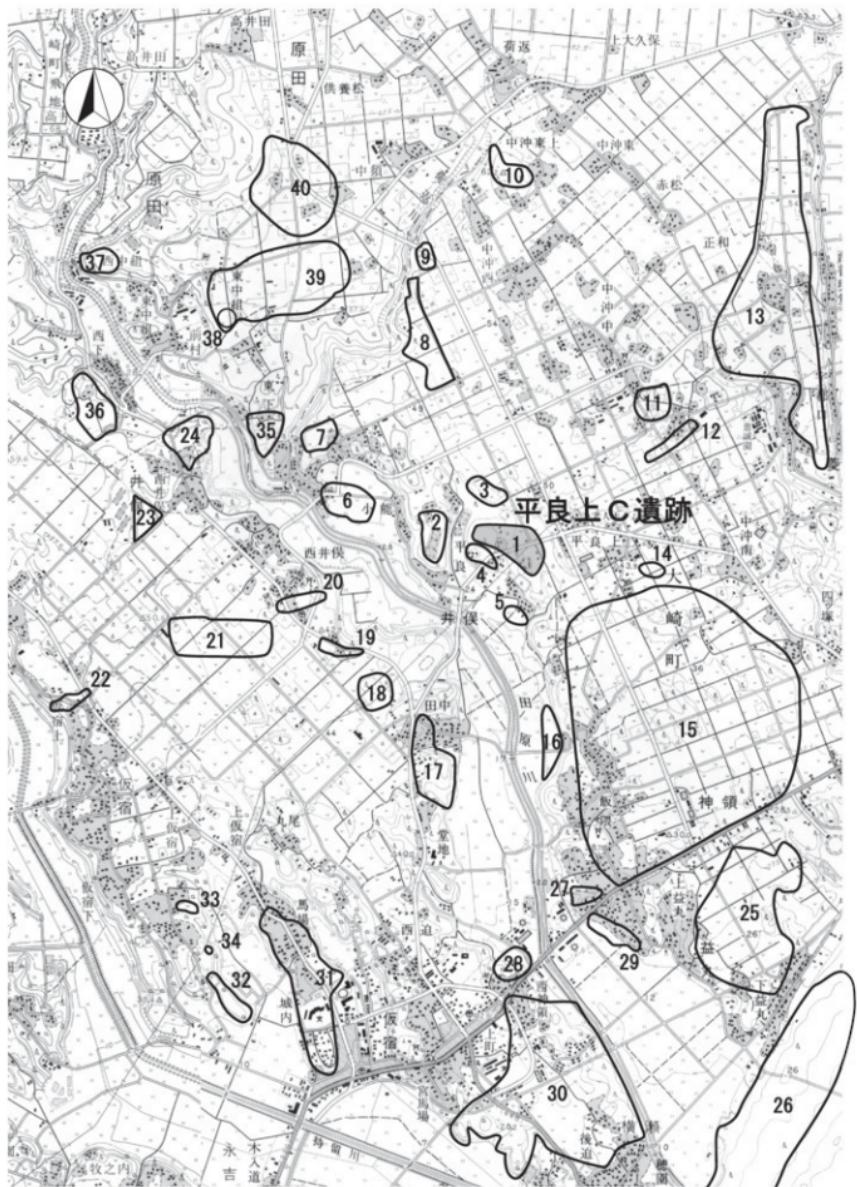
大崎町教育委員会 2005 「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

大崎町教育委員会 2014 「麦田下遺跡」 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）

鹿児島大学総合研究博物館 2007 「鹿児島大学総合研究博物館 News Letter No15」

鹿児島大学総合研究博物館 2008 「鹿児島大学総合研究博物館 News Letter No19」

鹿児島大学総合研究博物館 2009 「鹿児島大学総合研究博物館 News Letter No22」



第5図 周辺遺跡位置図 (1 : 25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡名	所在地	時代	地形	遺物等	備考
1 平良上 C 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣平良上	繩文	台地		本報告書
2 平良上 A 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣平良上平田	繩文、古墳	台地	土器片	H9 農政分布
3 平良上 B 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣平良上	古墳	台地	土器片	H9 農政分布
4 平良字都 A 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	古墳	平地		
5 平良字都 B 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生、古墳	平地		
6 井俣和田遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	古墳	平地		
7 井俣牧遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生、古墳	台地	土器片	H11 農政分布
8 中沖 B 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町菱田	弥生、古墳	台地	土器	H11 農政分布
9 中沖 A 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町菱田	弥生、古墳	台地	土器	H11 農政分布
10 久木野塚遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町菱田	弥生、古墳	台地	土器	H11 農政分布
11 稲荷塚 A 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町菱田	弥生、古墳	台地	土器	H11 農政分布
12 稲荷塚 B 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町菱田	古代	台地	土師器	H11 農政分布
13 牧ノ上 B 遺跡	鹿児島県志布志市有明町蓬原字牧ノ上	古墳	台地		
14 牛ヶ追遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町飯隈	弥生、古墳	台地	土器	H11 農政分布
15 飯隈遺跡群	鹿児島県曾於郡大崎町飯隈	弥生、古墳	台地		
16 別府下遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	古墳	平地		H18 確認調査(町)
17 田中古墳群	鹿児島県曾於郡大崎町井俣・神領	古墳	台地		
18 柿木遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生、古墳	台地	土器	H11 農政分布
19 坂上遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生、古墳	台地		H11 農政分布
20 宮脇遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	古墳、古代	台地	土器・土師器	H11 農政分布、H27・28 発掘調査(県)
21 堂園塚遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生、古墳	台地	土器	H11 農政分布、H23 確認調査(県)
22 荒園遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町飯宿	弥生、古墳	台地	土器	H11 農政分布、H24~26 発掘調査(県)
23 干浅遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生、古墳	台地	土器	H11 農政分布
24 金丸城跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	繩文、古墳、古代、中世、近世	台地	青磁・白磁・古伊万里・爛踏16基	H10~12 発掘調査(町)
25 大園・浜牧・茅池遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町益丸・神領 平安	弥生、古墳、古代、 平安	台地		H8 農政分布
26 汤沢遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町益丸松原	繩文、弥生、古墳	海岸	人来式・山ノ口式・ 須玖式・成川式	H11 発掘調査(町)
27 王子脇遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町益丸王子脇	古墳	台地		
28 田原 A 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町神領西神領	弥生	平地		
29 田原 B 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町益丸	古墳	海岸	須恵器片	
30 神領遺跡群	鹿児島県曾於郡大崎町神領	弥生、古墳、中世	台地		S43 発掘調査(町) 他
31 大崎城跡	鹿児島県曾於郡大崎町飯宿	中世、室町	台地	掘削3ヶ所	
32 胡摩ヶ崎城	鹿児島県曾於郡大崎町飯宿	中世、室町	台地	掘削4ヶ所	
33 美堂 A 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町飯宿	古墳、中世、近世	台地	成川式	H7 農政分布、 H14 発掘調査(町)
34 美堂 B 遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町飯宿	古墳	台地		H7 農政分布
35 長田遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字長田・教・春日免	繩文、弥生、古墳、 中世	台地	山ノ口式・成川式・様 持柱建物跡・白磁碗	H10 確認調査、 H11 本調査
36 坂ノ上遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字坂ノ上・前田・西原	弥生、古墳	台地		H11 農政分布
37 清水遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字清水	弥生	台地	打製石斧・磨製石斧	
38 原田古墳群	鹿児島県志布志市有明町原田字大塚・竹塚	古墳	台地	円墳5基・方墳1基	
39 大塚遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字中堀・大塚・番組・中原	繩文、古墳	台地		H10 農政分布
40 東中原遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字中堀	古墳	台地		H10 農政分布

### 第3節 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う発掘調査等を実施した遺跡は第2表に示すとおりである。ここでは、各遺跡の概要だけを記載する。詳細については報告書を参照していただきたい。

なお、平成29年度以降の発掘調査及び報告書刊行計画については、平成28年10月時点の予定である。

第2表 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

遺跡名	発掘調査年度	報告書刊行年度
1 見帰遺跡	H28	H29以降
2 安良遺跡	H28～29	H30以降
3 小牧古墳群	H27～28	H29以降
4 次五遺跡	H26～27	H29以降
5 木森遺跡	H26～	H29以降
6 春日堀遺跡	H26～	H29以降
7 平良上C遺跡	H26～27	H28
8 宮脇遺跡	H27～28	H29以降
9 堂園堀遺跡	H23（確認）	－
10 荒園遺跡	H24～	H28（一部）
11 永吉天神段遺跡	H24～27	H27・28（一部）
12 京の塚遺跡	H25～27	H29以降
13 小牧遺跡	H27～	H29以降
14 川久保遺跡	H26～	H29以降
15 町田堀遺跡	H25～28	H27（一部）
16 牧山遺跡	H25～	H28（一部）
17 田原道ノ上遺跡	H22～	H27・28（一部）
18 立小野堀遺跡	H22～	H28（一部）

#### 1 見帰遺跡（志布志市志布志町北大原）

安楽川の左岸、標高約70mの台地上に位置している。調査の結果、旧石器時代の細石刃、ナイフ形石器、縄文時代早期や後期の土器が出土した。平成28年度で発掘調査が終了した。

#### 2 安良遺跡（志布志市志布志町安楽）

安楽川の左岸、見帰遺跡と同じ台地上に立地する古墳時代の遺跡である。平成25年度に確認調査を実施し、発掘調査は平成28年度から実施する。

#### 3 小牧古墳群（志布志市志布志町安楽）

安楽川の右岸、標高約50mの台地の縁辺部に位置している。調査の結果、遺構は縄文時代早期の集石・土坑、近世の溝状遺構・古道跡が検出された。遺物は、縄文時代草創期の土器片や剥片、縄文時代早期の土器や耳栓・石鏃・磨石・異形石器、弥生時代の土器などが出土した。平成28年度で発掘調査が終了した。

#### 4 次五遺跡（志布志市有明町野井倉）

標高約40mの台地東端の縁辺部に位置している。調査の結果、遺構は縄文時代早期の集石、落とし穴、連穴土坑、土坑、縄文時代前期以降の落とし穴などが検出さ

れた。遺物は旧石器時代の細石刃核・細石刃・剥片・チップ、縄文時代早期の土器や石器が出土した。石器にはトロトロ石器や異形石器などの独特な資料も含まれる。

なお、本遺跡の発掘調査は、志布志市教育委員会が実施した。

#### 5 木森遺跡（志布志市有明町野井倉）

安田川の左岸、標高約30mの第二段丘面の西端に位置している。調査の結果、遺構は縄文時代早期の集石、中世の堀立柱建物跡・ピットなどを検出した。遺物は縄文時代早期の土器や石器、中世の須恵器・土師器・青磁・白磁・滑石製石鍋片・鉄製品などが出土した。特に、径が1.5m前後の浅い円形を呈した掘り込みを伴う集石が集中して検出された。

#### 6 春日堀遺跡（志布志市有明町蓬原）

安田川の右岸、標高約40mの台地の縁辺部に位置している。調査の結果、遺構は縄文時代早期の堅穴住居跡・連穴土坑・土坑・集石・落とし穴、弥生時代の堅穴住居跡・古墳時代の堅穴住居跡・溝状遺構・土坑・棒状稜集積遺構、古代～中世の焼土跡・堅穴建物跡・堀立柱建物跡・横跡・土坑・ピット、近世の古道跡・溝状遺構・土坑などが検出された。遺物は縄文時代早期の土器や石器、弥生時代の土器、古墳時代の土器・石器、古代の土師器が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂）も確認された。

#### 7 平良上C遺跡（曾於郡大崎町井俣）

本遺跡報告書を参照

#### 8 宮脇遺跡（曾於郡大崎町井俣）

田原川の右岸、標高約50mの台地の縁辺部に位置している。調査の結果、遺構は縄文時代早期の集石、土器集中などが検出された。遺物は旧石器時代の石核・磨石・フレーク・チップ、縄文時代早期の土器や石器などが出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂）の痕跡が確認された。

#### 9 堂園堀遺跡（曾於郡大崎町井俣）

標高約50mの台地の中央部に立地している。調査を平成23年度に実施したが、遺物包含層、遺構とともに確認されなかった。

#### 10 荒園遺跡（曾於郡大崎町坂宿）

標高約50mの台地の縁辺部に位置している。調査の結果、遺構は縄文時代早期の集石、弥生時代中期の堅穴住居跡・古墳時代の堅穴住居跡、中世の溝状遺構、時期不明の片薬研堀などが検出された。遺物は旧石器時代の細石刃核・細石刃・剥片・チップ、縄文時代早期の土器や石器、弥生時代中期の土器・鐵鏃、古墳時代の土器、中世の東播系須恵器・備前焼などが出土した。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂）も確認された。

### 11 永吉天神段遺跡（曾於郡大崎町永吉）

標高約 30 m の河岸段丘と標高約 50 m の台地の縁辺部に位置している。調査の結果、遺構は旧石器時代の石器製作跡、縄群、繩文時代早期の集石・埋設土器、繩文時代晩期の堅穴住居跡・落とし穴・土坑、弥生時代中期の堅穴住居跡・円形周溝墓を中心とした土坑墓群・掘立柱建物跡、古墳時代の堅穴住居跡・埋設土器、古代の掘立柱建物跡・土坑、中世の掘立柱建物跡・土坑墓・大型土坑・土坑・溝状遺構、近世の土坑墓などが検出された。遺物は旧石器時代の尖頭器、ナイフ形石器等、繩文時代早期・前期・晩期の土器や石器、弥生時代中期の土器・鐵鏃・磨製石鏃・石斧等、古代の須恵器・土師器、中世の土師器・白磁・青磁・東播系須恵器・瓦質土器・備前焼・滑石製石鍋、近世の陶磁器・寛永通宝などが出土している。また、液状化現象（噴砂）も確認された。特に中世の大型土坑は、貴重な発見である。

### 12 京の塚遺跡（曾於郡大崎町西持留・鹿屋市串良町細山田）

串良川左岸に位置する標高約 100 m の台地上に立地している。調査の結果、遺構は繩文時代早期の集石、繩文時代前期末から中期前半の土坑、近世～近代の溝状遺構、古道などが検出された。遺物は繩文時代早期・前期・中期・後晩期の土器や石器などが出土しているが、深浦式土器が大量に出土していることが特徴である。特に約 150 基ほど見つかっている繩文時代前期末から中期前半の土坑群は南九州でも極めて珍しく、また近畿地方や瀬戸内地方の土器と在地の土器が共存しており、広域な交流を示す貴重な資料である。

### 13 小牧遺跡（鹿屋市串良町細山田）

串良川左岸に位置する標高約 60 m の台地上に立地している。調査の結果、遺構は繩文時代早期の堅穴住居跡・集石・連穴土坑・土坑、繩文時代後期の土坑、古墳時代の堅穴住居跡・土器窯、中世以降の掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピット等が検出された。遺物は旧石器時代の細石刃・フレーク、繩文時代早期・前期・後期・晩期の土器や石器、弥生時代の土器や石器、古墳時代の土器・須恵器・磨製石鏃・鐵鏃・勾玉、中世以降の土師器・青磁・白磁等が出土している。

### 14 川久保遺跡（鹿屋市串良町細山田）

串良川右岸に位置する標高約 30～40 m の台地縁辺部に立地している。調査の結果、遺構は旧石器時代から繩文時代草創期にかけての縄群、繩文時代早期の連穴土坑・集石等、弥生時代の堅穴住居跡、古墳時代の堅穴住居跡・鍛冶関連遺構・古道等、古代の掘立柱建物跡、中世の掘立柱建物跡・堅穴建物跡・土坑墓等、近世の掘立柱建物跡等が検出された。遺物は旧石器時代の細石刃核・細石刃等、繩文時代早期・前期・晩期の土器や石器、弥生時代の土器、古墳時代の土器・勾玉・垂飾品・管玉・

金床石・輪の羽口・鉄宰・鍛造鋒片、古代の土師器や須恵器、中世の土師器・白磁・青磁・瓦器窯・東播番系須恵器、近世の薩摩焼・寛永通宝などが出土している。

### 15 町田堀遺跡（鹿屋市串良町細山田）

標高約 90 m の台地に立地し、笠野原台地の北東縁辺部に位置している。調査の結果、遺構は繩文時代早期の集石、繩文時代後期の堅穴住居跡・埋設土器・落とし穴等、弥生時代の堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑、古墳時代の地下式横穴墓・円形周溝墓等が検出された。地下式横穴墓からは、副葬品とともに人骨も発見された。遺物は繩文時代早期の土器や石器、繩文時代後期の土器・勾玉・垂飾品・石刀・石斧・磨石・弥生時代の土器や石器、古墳時代の土器・劍や鐵などの鉄器類、古代の土師器や墨書き土器などが出土している。約 90 基もの地下式横穴墓が発見されており、隣接する川久保遺跡の集落跡との関連が注目される貴重な遺跡である。平成 28 年度で発掘調査が終了する予定である。

### 16 牧山遺跡（鹿屋市串良町細山田）

標高約 130 m の台地上に立地し、笠野原台地の北縁辺部に位置している。調査の結果、遺構は繩文時代早期の集石・石器製作跡・石器集中部、繩文時代前後の埋設土器、繩文時代後期の環状にめぐる埋設土器群や柱穴群・土器・石器等、繩文時代晩期の土坑・柱穴、弥生時代の土坑・柱穴、中世の古道跡などが検出された。遺物は旧石器時代の測量・繩文時代早期・後期・晩期の土器や石器、弥生時代の土器や石器、中世の青磁などが出土している。特に繩文時代後期の柱穴群や弥生時代中期の集落跡は注目される。

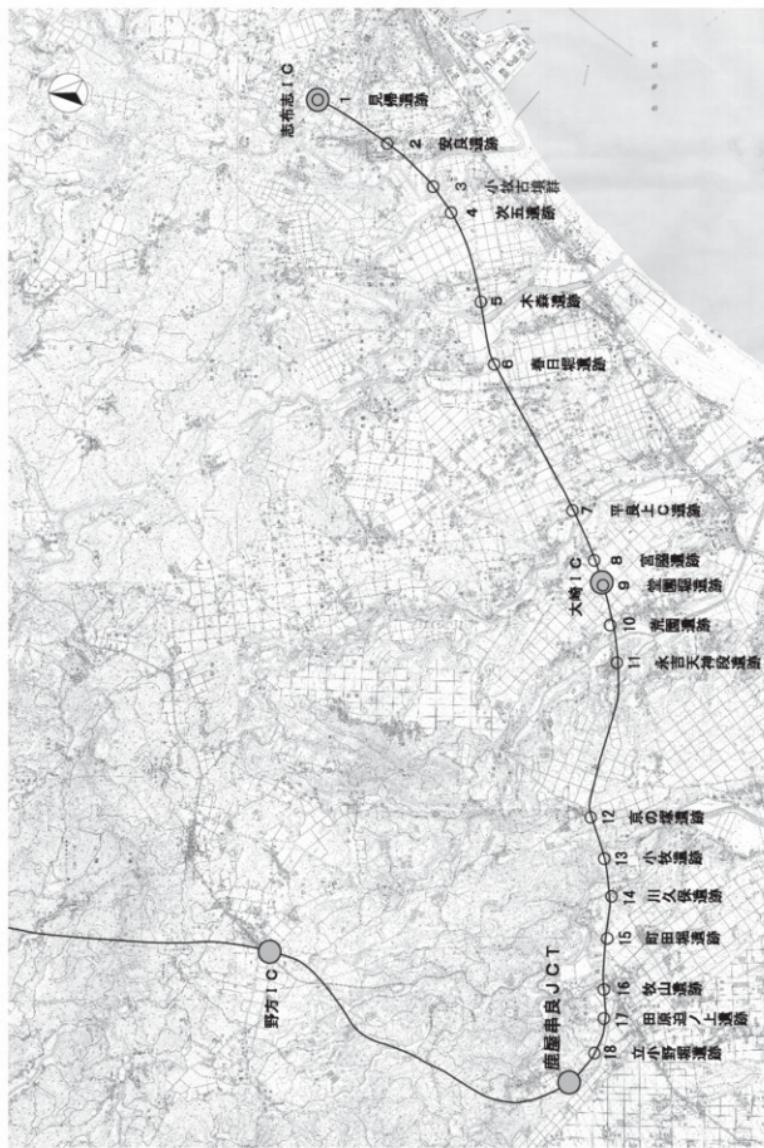
### 17 田原迫ノ上遺跡（鹿屋市串良町細山田）

標高約 130 m の台地上に立地し、笠野原台地の北縁辺部に位置している。調査の結果、遺構は繩文時代早期の堅穴住居跡・連穴土坑・落とし穴・土坑・集石・石器製作跡、弥生時代中期の堅穴住居跡・大型建物跡・掘立柱建物跡・円形周溝・古墳時代以降の溝状遺構・畝状遺構群・近世の溝状遺構が検出された。遺物は繩文時代早期・後期・晩期の土器や石器、弥生時代中期の土器・石器・土製勾玉・鉄器片等が出土した。

### 18 立小野堀遺跡（鹿屋市串良町細山田）

標高約 130 m の台地上に立地し、笠野原台地の北縁辺部に位置している。調査の結果、遺構は古墳時代の地下式横穴墓・土坑墓・溝状遺構等が検出された。地下式横穴墓からは、初期須恵器・劍・刀・刀子・鐵などの鉄器や国内最古級の青銅鏡などが出土している。また、副葬品とともに人骨も発見されている。190 基もの地下式横穴墓が一度に発見された例は無く、南九州地方の当時の墓制を考える上で、町田堀遺跡とともに良好な資料となつた。

第6図 東九州自動車道閉鎖跡位置図（1：25,000）



## 第Ⅲ章 調査の方法と層序

### 第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理報告書作成作業について簡潔に述べる。

#### 1 発掘調査の方法

平良上C遺跡の発掘調査は、平成26年度（約5か月間）、平成27年度（約2か月間）の2年にわたり実施した。調査対象表面積は5,905m<sup>2</sup>、調査対象延面積も同じく5,905m<sup>2</sup>である。

調査区割り（グリッド）は、計画された道路のセンターライン上の「STA81」と「STA82」の延長線を中心に、西側から東側に向かって10m間隔に、1、2、3…、北側から南側に向かってA、B、C…と設定した。

このグリッドを基にして、遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また、トータルステーションで測量作業を行う場合、測量座標はG-21区の右下を原点(0,0)とし、縦軸をX、横軸をYとした。

調査区全体を覆う雑木や雜草の伐採を行った後、試掘調査の結果に基づき、重機で表土から遺物包含層上面まで除去した後、遺物包含層は人力で掘り下げを行った。しかし、遺物包含層であるⅦ層の下位はほぼ無遺物層であるため、一部重機を用いて慎重に掘り下げを行った。

検出遺構については、移植ごて等の遺構の検出に適した道具を用いて慎重に調査し、写真撮影を行った後、平板実測等による記録保存を行った。出土遺物については、平板実測またはトータルステーションで取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法及び概要（詳細は第1章に掲載）は、以下のとおりである。

#### 平成26年度

試掘調査の結果を受け、本調査は、平成26年11月4日から平成27年3月10日までの約5か月間、調査対象面積は5,680m<sup>2</sup>で行った。

当初計画では、平成26年11月4日から平成27年2月25日の間、表面積4,500m<sup>2</sup>、延面積4,500m<sup>2</sup>を対象に調査を行う予定であったが、西側斜面より大量の土器片や火熱を受けた礫が斜面全体から出土したため、調査区西側の最深部付近を拡張し（1,180m<sup>2</sup>）調査を実施した。拡張分の作業量は、作業員の増員、遺構実測委託費の増額、調査期間の延長などに対応した。

調査開始に当たり、B区の東西方向に延びる重機進入路を設置した。調査は当初の調査範囲西端に当たるB-F

-11～13区の表土～V層の無遺物層を重機で剥ぎ、尾根に当たるB-F-13・14区に土層観察用のベルトを設定した。その後、B-F-15～19区の表土剥ぎを行った。

B-F-11～13区のVI・VII層の調査を開始した直後から、大量の土器・礫が出土したことから、隣接するC-F-9～11区の表土剥ぎを行い調査区を拡張し調査を行った。Ⅶ層掘り下げ後、Ⅶ層上面で遺構の検出を行い調査を終了した。B-F-15～19区では、未調査部分の表土剥ぎを行った後、D-20・21区の電柱下部分を除いて、Ⅶ層上面まで掘り下げ調査を終了した。調査区東端の平坦面から豎穴住居跡が発見されたことから、東側に隣接した道路下まで調査区を拡張することとなり、電柱下の未調査部分と合わせた125m<sup>2</sup>が平成27年度の調査範囲となった。

なお、遺物包含層までの深さが1.5m以上あり、安全確保のため南北壁面に沿って段差を設け調査を進めた。



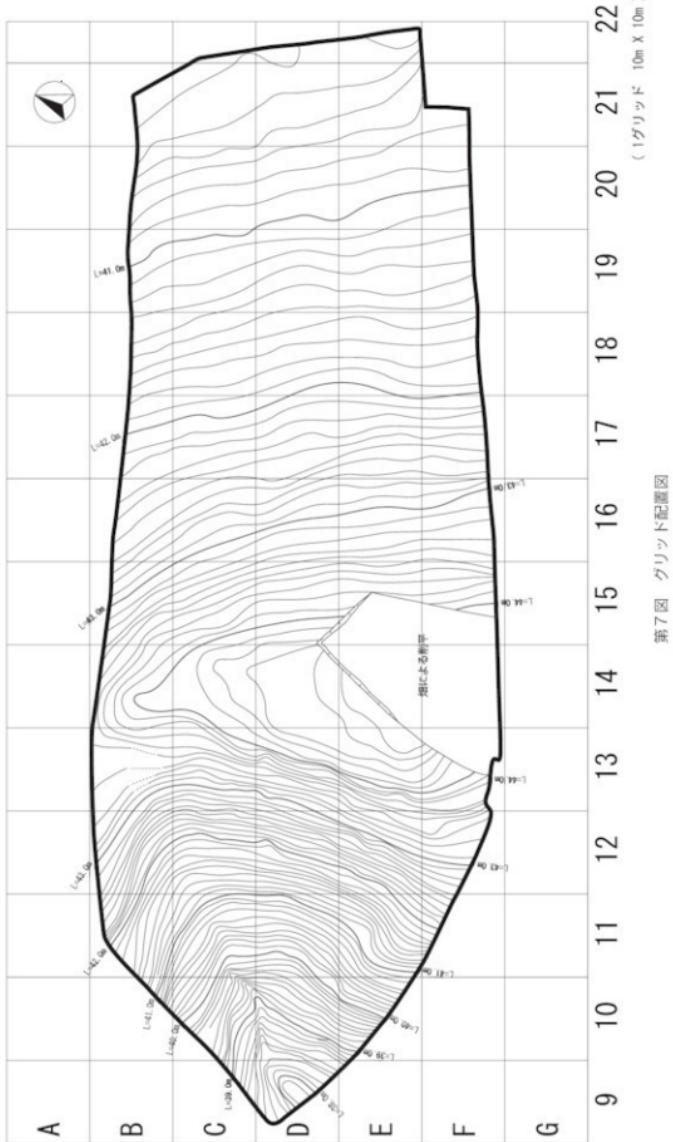
#### 平成27年度

調査期間は、平成27年7月13日から平成27年8月21日までの約2か月間であった。

当初計画では、平成27年7月13日から8月7日の間、表面積125m<sup>2</sup>、延面積125m<sup>2</sup>を対象に調査を行う予定であったが、道路下から豎穴住居跡が発見されたことに伴い、遺跡の広がりを確認し、集落の様相を明らかにするため、隣接する部分を再度拡張し（100m<sup>2</sup>）調査を実施した。拡張分の作業量は、調査期間の延長、支援体制の強化に対応した。最終的な調査実施面積は、225m<sup>2</sup>であった。

調査は重機で表土剥ぎを行った後、遺物包含層をⅦ層上面まで掘り下げ、遺構検出を重点的に行なった。遺物の出土量が極めて少なかったので、一部重機を使って慎重に調査を進めた。

その後、危険箇所の一部埋め戻しを行ってから引き渡しを行い、本遺跡の本調査のすべてを終了した。



第7図 グリッド配置図

## 2 遺構の認定と検出方法

本遺跡で検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

### (1) 遺構の認定

検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、担当職員で検討したうえで遺構の認定を行った。本書掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

堅穴住居跡及び堅穴遺構は人為的に掘り込まれた大型の堅穴遺構で、埋土や形状、床面の有無、遺物の出土など総合的に判断した。

土坑及びビットは人為的に掘り込まれたやや小型の堅穴遺構で、径50cm以下のものは円形のものをビット、それ以上のものを土坑とした。方形、円形、楕円形などタイプが異なるものが多いが、検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し区別した。

連穴土坑は二つの土坑がトンネルで繋がっているもので、楕円形と円形の組合せが多い。中にはブリッジ部分が崩落したものも含む。大部分が埋土中や壁面に焼土や炭化木を伴うので判断の材料とした。

集石は、本遺跡で34基検出した。また、集中しないものの被熱し一般礫が数多く出土している。認定の基準としては、ある程度の数量の拳大以上の礫が集中して検出されたもので、礫の密集度、検出状況、掘り込みの有無、周辺環境など、全てを総合的に判断した。やや散謙状に広がるものや、当初は土坑と判断して調査したものなども含まれる。

### (2) 遺構の検出方法

遺構の検出は各年度とも共通の調査方法として、当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが、遺物包含層の主体となるⅧ層の色調が黒褐色土であり、掘り込み面、埋土とともに黒褐色土であるという難しさがあった。出土遺物の集中や鍵となるバミスの集中などの特徴的な検出状況がない限り、やや判断が難しいのが現実であった。そこで、判別のしやすい地層（Ⅸ層）上面での検出が多くなってしまった。調査区外へ延びる遺構を、調査区拡張後、やや上位で検出できたので、これまで以上に調査のあり方を再検討し、今後の調査に活かしたい。

## 3 整理・報告書作成作業の方法及び内容

平良上C遺跡の整理・報告書作成作業は、平成27・28年度の2年にわたり実施した。平成27年度は発掘調査作業と同時に並行で行われていた時期があるが、基本的には整理作業の方法及び内容は変わらない。そのため、本項では整理・報告書作成作業が開始された平成27年度の作業方法及び内容を中心に述べる。

## 平成27年度

平成26・27年度の発掘調査成果品の整理を行った。

図面整理は遺構実測図・遺物出土分布図・土層断面図・地形図等に仕分けし、台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは、未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。その際、遺物に付着している重要な情報を除去するないように洗い、微細な剥片石器については、超音波洗浄機も使用した。

注記は、水洗いと並行して順次行った。注記を行う際、薬品を使用するため換気に入注意しながら手作業で進められた。これまで刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している県理文センターの縄文調査室に確認し、遺跡名を表す記号を「TRC」とした。

土器の分類・接合は遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、包含層出土土器については土器の胎土や文様等で分類し、調査区東側と西側で接合を行い、その後両者を接合する方法をとった。

石器については再度石器と一般礫との選別を行い、剥片石器と礫石器に分けた後、器種ごとに分類した。石器実測については、作業の効率化を図るために石器実測委託を行った。

遺物出土分布図は平板実測で取り上げた情報はデジタルイザーを用いてデータ化し、トータルステーションで取り上げたデータと統合し、図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は基本的に発掘調査の現場で行ったものを実測図や写真等を用いて、各年度の発掘担当者を含めた職員で再検討し、確定した。掲載スケール決定後、それにあたった下図面を鉛筆トレースで作成し、点検・修正後、ペントレースを行った。トレースは基本的にペントレースで行ったが、一部の遺構ではデジタルトレースを使用した。

遺構配置図・土層断面・地形図は、鉛筆トレースで下図面を作り、点検・修正後、デジタルトレースを行った。

8月に全ての発掘調査が終了した関係で整理作業だけでなく、報告書作成作業も同時に行つた。一部原稿執筆も開始した。

## 平成28年度

土器については接合した中から報告書掲載遺物を選別し、部分的な補強・復元を行った後、実測・拓本・トレース、レイアウトを行つた。

石器については一部実測委託を行い、実測委託遺物以外で実測が必要なものを選別し、実測・トレース、レイアウトを行つた。

文章執筆、観察表作成、写真撮影等終了後、印刷・製本を行つた。

## 第2節 層序

本遺跡はD・E - 14区付近の尾根部南側に一部畝造による削平が認められるが、全体として自然地形が概ね良好に残存していた。

しかし、丘を中心に東西方向へ下っていく地形であるため、尾根部では上位の層の堆積が悪く、下位の層も部分的に欠落するなど乱れていた。対的に、谷底に向かう急斜面では、谷筋に沿って層が乱れ、最深部近くでは、上位から流された土砂が一部ブロック状に厚く堆積しているのが確認された。

また、遺跡全体で樹木の根による搅乱が見られ、樹痕の最深部は遺物包含層を貫いており、遺構・遺物に影響を及ぼしていた。

本遺跡では、標高の高い尾根部以外の全域に、鬼界カルデラ噴火時の地震による液状化現象で生じた噴砂が確認された。特異な地形での噴砂の堆積状況が見られ、貴重な資料となった。

包含層や遺構・遺物の年代を把握する手掛かりの1つとなる火山灰等の詳細については、以下のとおりである。

I層：表土、遺跡を覆っていた堆積土で樹木等を含む。

II層：黒色系の色調をもつ層である。色調や火山灰の有無の違いで4層に分層した。

II O層：砂質が強く、谷底にのみ見られるII層の二次堆積土。

II a層：砂質で厚く堆積している。

II b層：細粒な黄白色バミス（御池火山灰、約4,600年前の噴出物）混じり。

II c層：砂質でやや粘性を持つ。

III層：軽石（池田降下軽石、約5,700年前の噴出物）混じりの黒褐色土、全体に安定して堆積している。

IV層：硬質な暗黃褐色土。

V層：アカホヤ火山灰（約7,300年前、鬼界カルデラ起源の噴出物）関連の層であるが、噴砂の層を含めて、特徴の違いで3層に分層した。

V a層：赤褐色土で、アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。

V b層：鬼界カルデラ噴火時の地震による液状化現象で生じた噴砂の層で、堆積の特徴から新たに3層に分層した。

V b-a層：軽石主体で、シラス、アカホヤ火山灰の混在土、主に谷部を中心に堆積。

V b-b層：噴出したシラス、丘以外に広く堆積。

V b-c層：細粒な白色バミスを含む砂質土。

V c層：アカホヤ火山灰一次の軽石層。

VI層：やや粘性のある砂質土で、縄文時代早期の遺物包含層である。

VII層：黄白色バミス（P12、約9,000年前の桜島起源の

噴出物）を含む硬質土で、縄文時代早期の遺物包含層である。

VIII層：薩摩火山灰層である。硬質でブロック状に堆積するが、丘部は不明瞭な部分が多い。

IX層：粘質の強い暗褐色粘質土である。

X a層：明黄色砂質土である。シラスの二次堆積土で、堆積状況により細分化される。

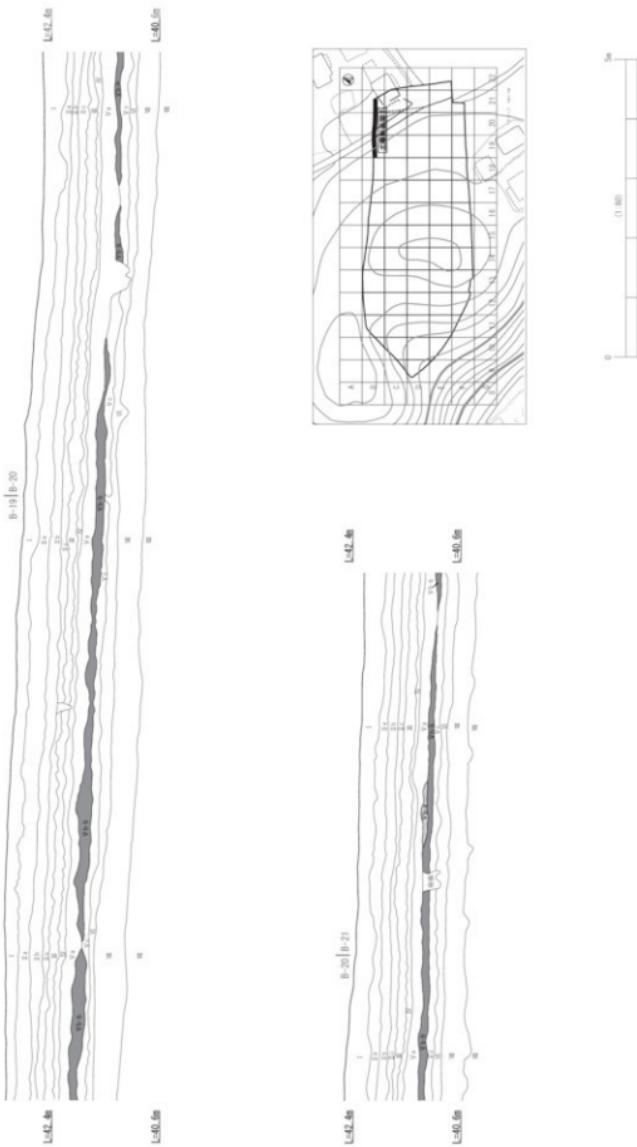
X b層：この層からAT（シラス）と呼ばれる約26,000~29,000年前の姶良カルデラ起源の火山灰層となる。この層は無遺物層で、南九州本土では厚く堆積している。

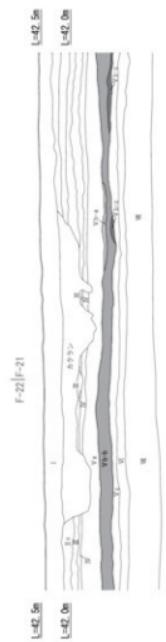
※火山灰の年代については、2003 町田洋 新井房夫著 東京大学出版会『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』(P108~110)から引用した。なお、年代は放射性炭素年代測定法で算出され、曆年較正した年代である。

第3表 平良上C遺跡の基本土層

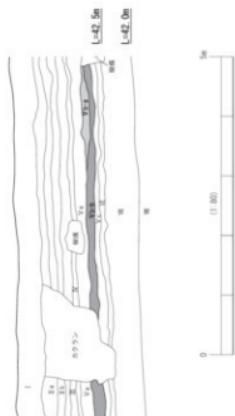
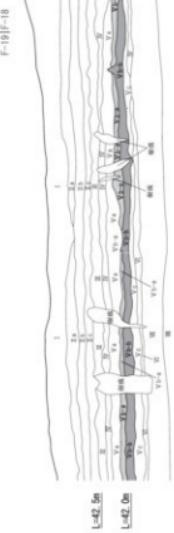
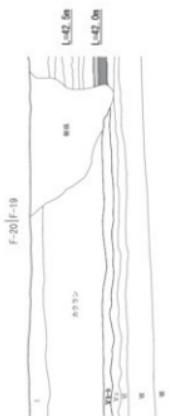
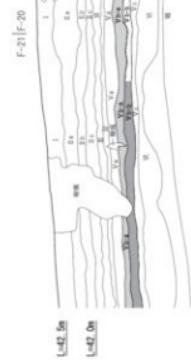
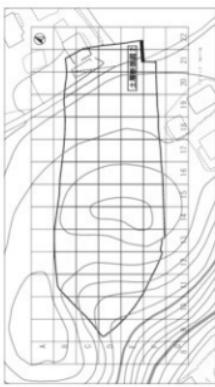
層	色調など	層厚
I層	表土	30cm
II O	黒色土	50cm
II a	黒色砂質土	30cm
II b	黒褐色土（御池火山灰）	10cm
II c	黒色土	15cm
III層	黒褐色土（池田降下軽石）	10cm
IV層	暗黃褐色土	10cm
V a	赤褐色土	40cm
V b-a	黄橙色砂礫土	10cm
V b-b	乳茶褐色砂質土	20cm
V b-c	淡黃褐色砂質土	2cm
V c	黃褐色軽石	10cm
VI層	暗茶褐色砂質土	15cm
VII層	黑褐色土（P12）	40cm
VIII層	淡黃褐色砂質土（震摩火山灰）	25cm
IX層	暗褐色粘質土	20cm
X a	明黄色砂質土	-
X b	黄褐色砂質土（シラス）	-

第8図 土層断面図1 (B-19~21区)

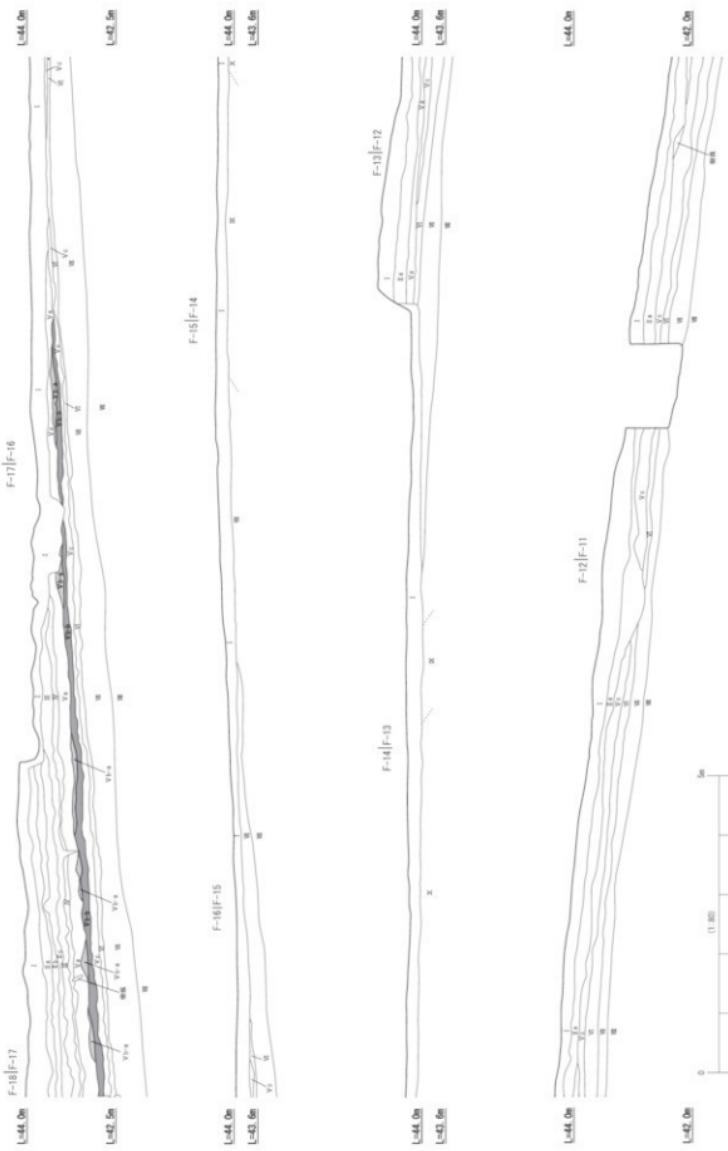




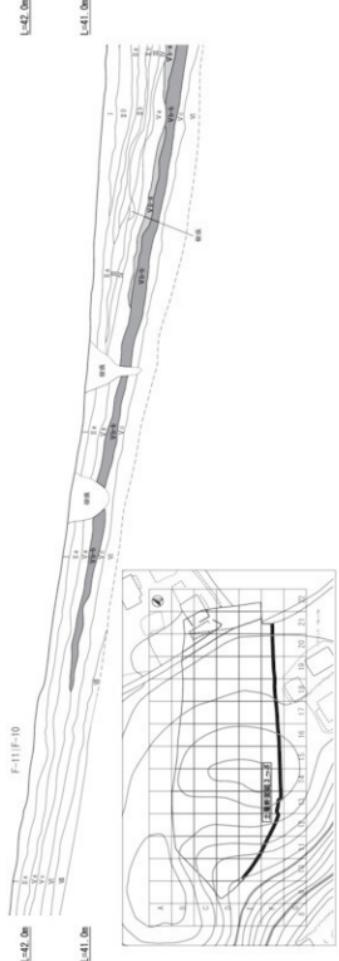
第9図 土壌断面図2 (F - 22~21区)



第10図 土壌断面図3 (F - 21~18区)



第111図 土壌断面図4 (F-18~11区)

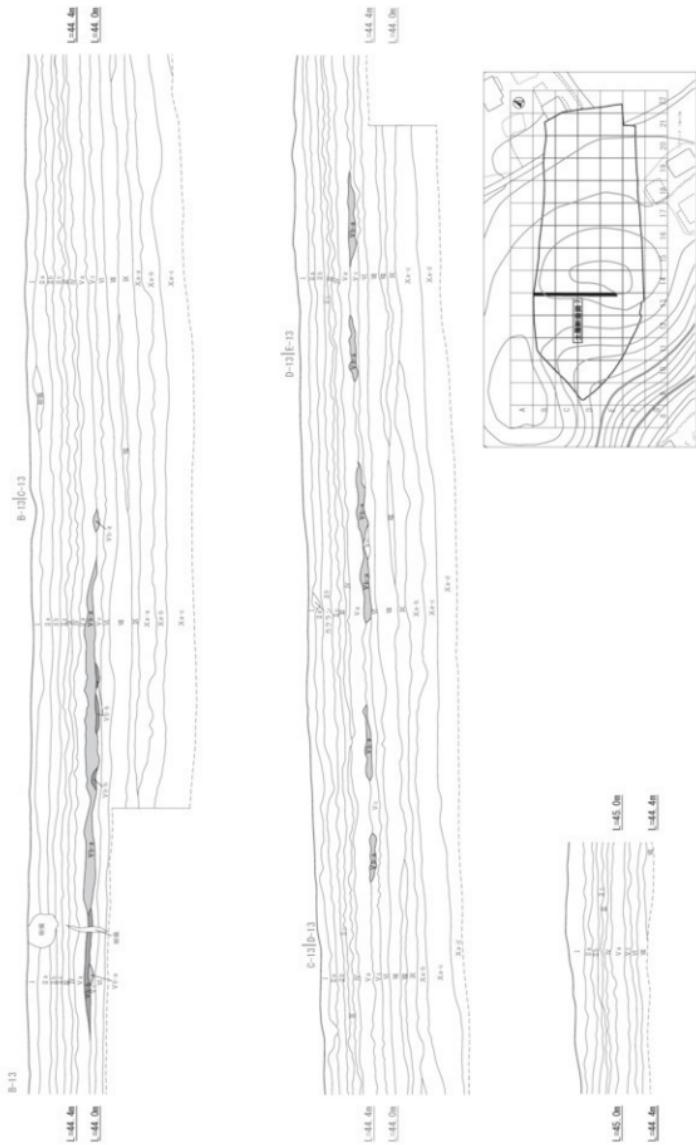


第12図 土層断面図5 (F-11~10区)

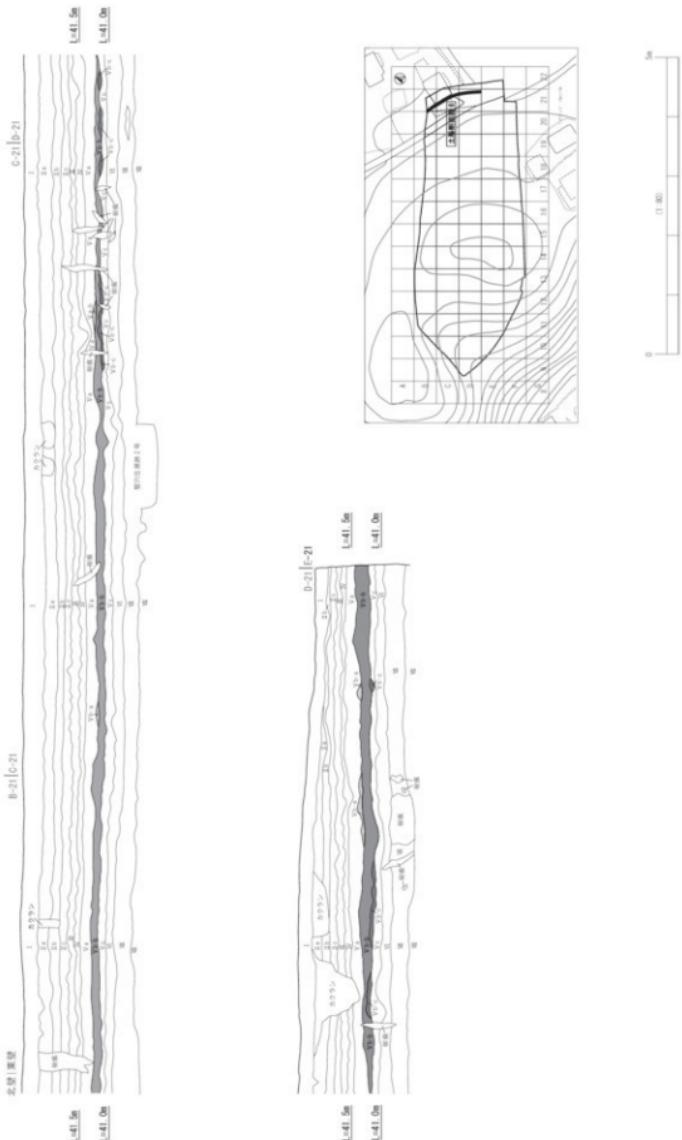


第13図 土層断面図6 (D-E-9区)

第14図 土層断面図7（B~E – 13区）



第15図 土層断面図8 (B~E - 21区)



## 第IV章 発掘調査の成果

### 第1節 繩文時代早期の調査

#### 調査の概要

本遺跡は縄文時代早期を主体とする遺跡である。縄文時代早期の該当層は、VI層及びVII層で平坦面では地表から1.5~2 mの下位に広がる。

一部VII層まで削平された箇所、急斜面で堆積が不安定な箇所があったが、全体的には安定した土層であった。表層から薩摩焼、古墳時代と思われる土器片が数点出土したが、掲載していない。II~VI層では遺構遺物は確認されなかつた。

縄文時代早期の地形はE~14区付近が標高44 m強で調査区内では一番高く、ここからほぼ北西に向かって尾根が走る。この尾根の東側にはながらかに下る緩斜面が続く地形で、西側は急斜面となる。この急斜面の土層は深くなるにつれて粘質も強くなり、不安定な堆積状況となる。調査区内におけるⅦ層上面の標高は約38 mから42 mを測り、その差は6~7 mである。なお、地形図は、遺物包含層であるVI・VII層を削除した後のⅦ層上面を測量した。

調査区東側の緩斜面には堅穴住居跡6軒、堅穴造構2基、連穴土坑3基。主に調査区中央付近から東側では土坑15基、E~14区付近の小高い部分を取り回むように集石34基が検出された。これらの遺構内から遺物が出土しているが、遺構の時期を裏付けるような出土状況ではなかった。検出状況からすると、堅穴住居跡と連穴土坑の検出エリアは重なり、集石の検出エリアとは距離をおくという特徴がある。また、調査区内からは集石としてまとまりはないが、被熱し変色、劣化、破碎した蹠が多く見られた。集石として利用された後に廃棄された蹠の可能性もある。さらに、土器やチップが集中して確認された箇所もあった。

E~14区付近から伸びる尾根筋の東側の16区から18区では多くの遺物が出土した。そして、調査区の東端に向かう19区から徐々に出土が少なくなり、22区付近では遺物の出土は確認できなかつた。また、尾根筋の西側の急斜面では、標高が低くなるにつれて遺物の出土が多くなる傾向があった。特に、11区から9区では谷筋に沿って多量の遺物が出土した。尾根筋の東側の緩斜面から出土した遺物と比較すると急斜面から出土した遺物は摩耗したものが多く見受けられる。これらのことから急斜面で確認された遺物の多くは原位置を保っていないと考えられる。今回の発掘調査において土器では下割峯式土器の出土が圧倒的に多く、次いで石坂式土器、桑ノ丸式土器であった。石器では磨製・打製を含め石斧の出土

が多かった。

### 第2節 検出遺構

縄文時代早期の遺構は、堅穴住居跡6軒、堅穴造構2基、連穴土坑3基、土坑15基、集石造構34基が検出された。集石造構は、遺物包含層であるVII層及びⅦ層上面より検出された。堅穴住居跡、堅穴造構、連穴土坑、土坑はほぼⅦ層上面の検出であるが、状況により検出面が異なるものも含まれる。

遺構内からは多くの遺物が出土しており、埋土中からの出土を含めた遺構内遺物の総数は、土器233点、石器57点、計290点である。遺構内出土遺物については、比較的に残存状況が良いものを実測し掲載した。土器は完形での出土がなかったため、できるだけ型式分類が可能なものを掲載したが、文様が施されているものが数点ある。なお、土器型式の分類は後述する遺物包含層出土土器の分類に即す。文中に分類の記述がないものに関しては、遺構内遺物観察表に記載してある。

#### 1 堅穴住居跡（第16~25図）

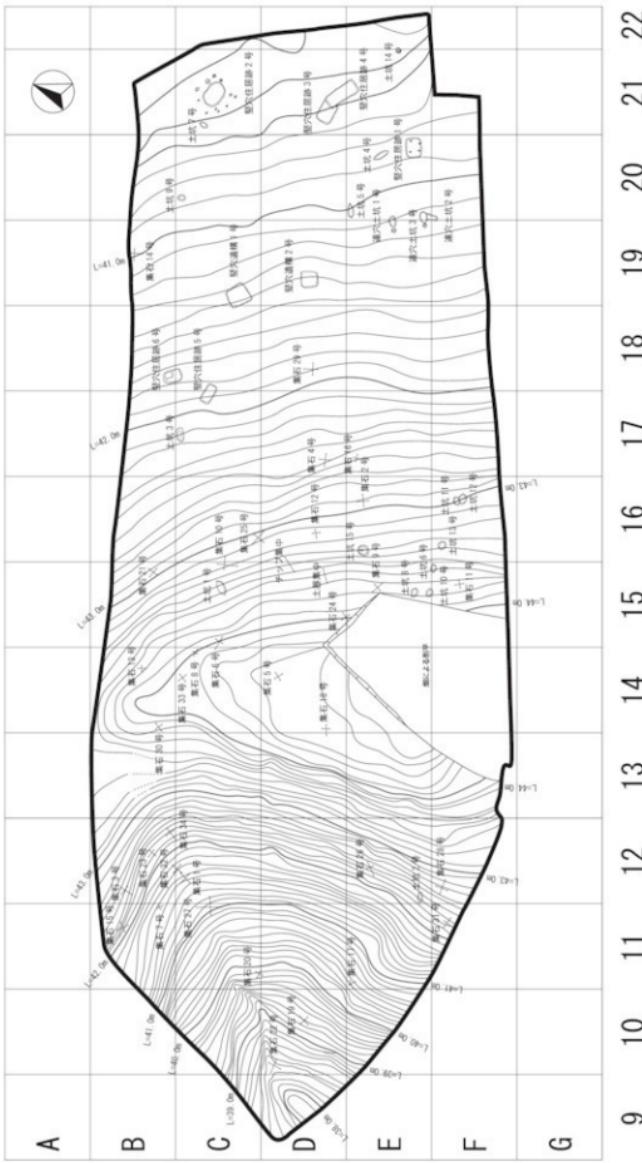
堅穴住居跡は、遺跡全体で6軒検出された。検出面はいずれもⅦ層上面であるが、掘り込み面は検出面より上位のⅦ層中にあると思われる。埋土はⅦ層に該当する細かい黄色及び白色パミスを含む黒褐色土が主体であるが、暗茶褐色土や粘性のある茶褐色土がブロック状に混在するものも見られる。堅穴住居跡は、13~14区周辺の尾根から東側へやや離れた17~21区の標高41 m前後のほぼ平坦面に全て立地している。堅穴住居跡3・4号に切り合いが見られる以外は、5~20 m程度の間隔を空けて位置しており、ほぼ同時期の可能性が考えられる。

#### 堅穴住居跡1号（第18・19図）

E~20区、東側へ緩やかに下っていくほぼ平坦面で検出された。周辺には多くの遺構があり、北側3 mに土坑4号、西側7~8 mには連穴土坑1~3号が位置している。形状は231×184cmの隅丸方形を呈し、床面積は3.14m<sup>2</sup>である。検出面からの深さは26cmで、主軸は略東西方向である。掘り込みのプランは明瞭であり、壁際の埋土は粒状の黄色・白色パミスを含むやや硬質の黒褐色土であるが、中央部の上位には大部分暗茶褐色土が混入していた。この土は均一でなく黒色土と茶褐色土の混在土であり、部分によって大きなブロック状に見える。遺物の大部分は③の暗茶褐色土からの出土である。土器の多くは床面からやや浮いた状態で出土し、遺物表面は摩耗しており、残存状態が悪い。流れ込みの可能性もある

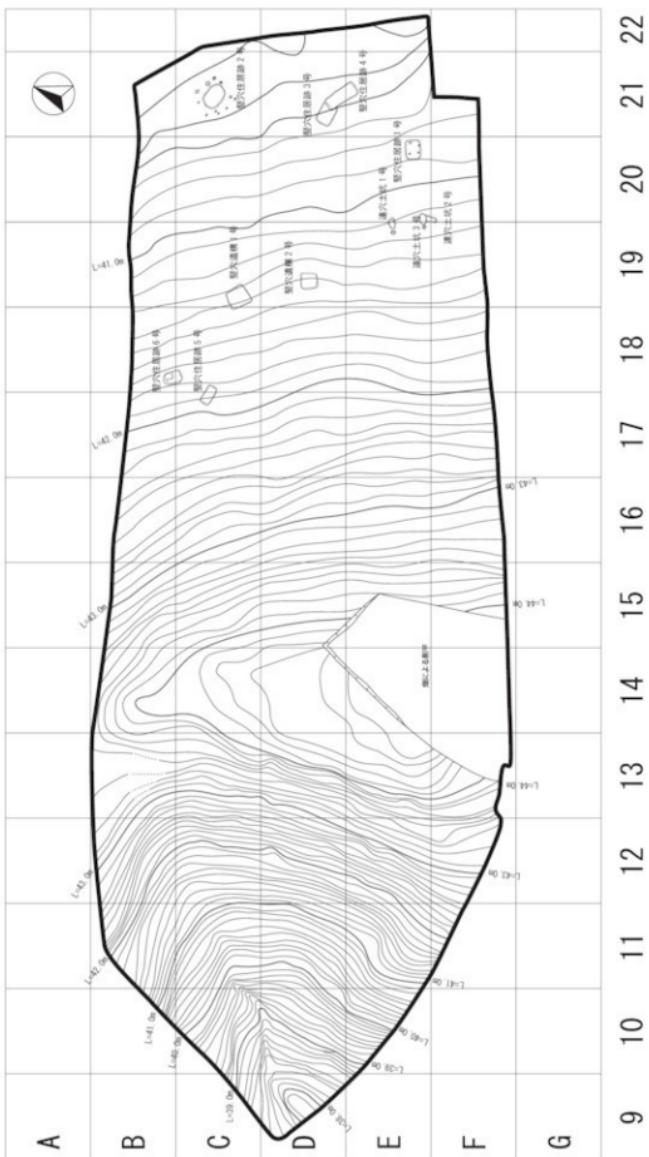
第16図 遺構記図

(1)アリッヂ 10m×10m 地形図 四隅上端)



9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

(1 ブリッヂ 10m × 10m 地形図 要素上面)



第17図 垂直柱跡、竪穴遺構・通穴坑配置図

が、周辺からは遺物の出土がほとんど無いことから、住居内遺物が砂質土の大量流入により浮き上がった可能性が考えられる。床面と判断した面も多少安定性に欠ける。原因としては噴砂の影響や木の樹根とも考えられるが、詳細は不明である。床面には柱穴と思われる小ピットが4基確認された。検出面付近から炭化物が出土し、C14年代測定の結果は、 $8,860 \pm 40$ yrBPであった。

遺物は全体的に大きな土器片が多く、同一個体のものも混ざる。遺構内の北側に集中して総計85個の遺物が出土しており、その中から小片のものを除いた土器16点について実測し、掲載した。

1～11は円筒形を呈し、外面上に貝殻腹縫による刺突文を斜位または横位に施すVI類の下剥峯式土器に相当する深鉢である。1、2は口縁部である。1の口縁部断面は方形に近く、口唇部を肥厚させ、緩やかに内済する。口縁部に横位、胴部に斜位の貝殻刺突文を施している。2は直線的に立ち上がる口縁部で、貝殻刺突文は口縁部から約5cmのところまで横位に、それより下の胴部には斜位に施されている。また、口縁直下には長さ約3.5cm、幅約1cmの瘤状突起を縱位に貼り付けている。内面は丁寧なナデ調整が施される。3～7・9は胴部片である。3は貝殻腹縫部による刺突文をやや広めの間隔で羽状に施している。胎土に砂粒が多く混ざる。4は貝殻刺突文を胴部上位と下位には斜位、中位には横位に施している。横位の刺突文が斜位の刺突文に切られている痕跡が確認できることから、横位に刺突した後に斜位の刺突文を施している可能性が考えられる。5は斜位の貝殻刺突文を密に施しているが、中位より下部には横位に施している。また、刺突文は、4と同様に横位に施後、斜位に施している。内面は丁寧なナデ調整が施される。6は上位に横位、胴部に2条位置の刺突文を鋸歯状に施し、文様を構成している。7は外面上に斜位の貝殻刺突文を施し、内面は丁寧なナデ調整を施している。9はやや縱位気味の刺突文を施す胴部であり、底部近くに施文は無く、丁寧なナデ調整痕が残る。8、10、11は底部である。8は残存状況が悪いが、胴部に貝殻腹縫部による刺突文が観察できる。10は、胴部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。計7片の接合資料あり、復元底径は11.0cmであるが、全体的に摩滅が見られ残存状態は不良である。11は包含層遺物と接合しており、接合距離は約30mmである。胴部下端部の器壁は薄く、外面上に貝殻刺突文を施し、内面は丁寧なナデで調整されている。肥厚な底部はやや上げ底気味であり、胴部との接合は外縁上である。底部外面はナデ調整で丁寧に仕上げている。復元底径は12.4cmを測る。

12～16は、短条文頭で鋸歯状の文様を施す特徴をもつ土器である。12、14、15は口縁部、13は胴部、16は底部である。口唇部断面は方形を呈し、平坦面をもつ。いず

れも口縁部側面に突帯が1条巡り、口縁端部から突帯下位まで横位の貝殻刺突文を数条施す。胴部には、3本一組もしくは4本一組の短い条痕文を鋸歯状に施す点は一緒である。ただ、突帯下位に施された横位の貝殻刺突文が、12が4条、14が1条、15が2条と異なる。内面調整はいずれも丁寧なナデ調整が施される。また、口唇部や胴部は直線的で、湾曲の度合いが小さく、円筒形以外の器形の可能性がある。口唇部が途中で湾曲する点を除けば、12とXV類の534は類似する。16は丁寧なナデ調整により内部が仕上げられた底部片である。底径は9.1cmを測る。胴部下位には12～15に見られる鋸歯状の短条痕文の折り返し部分がわずかに確認できる。12～16は外面上の文様形態から、VII類に相当すると考えられる。

#### 堅穴住居跡2号（第20・21図）

C-21区、東側へ緩やかに下っていくほぼ平坦面で検出された。調査区の東端にあたり、一部分の検出であったため調査区を、拡張して全体像を確認してから調査を行った。大部分はVII層上面での検出であるが、拡張した部分についてはVII層下位でプランを検出した。

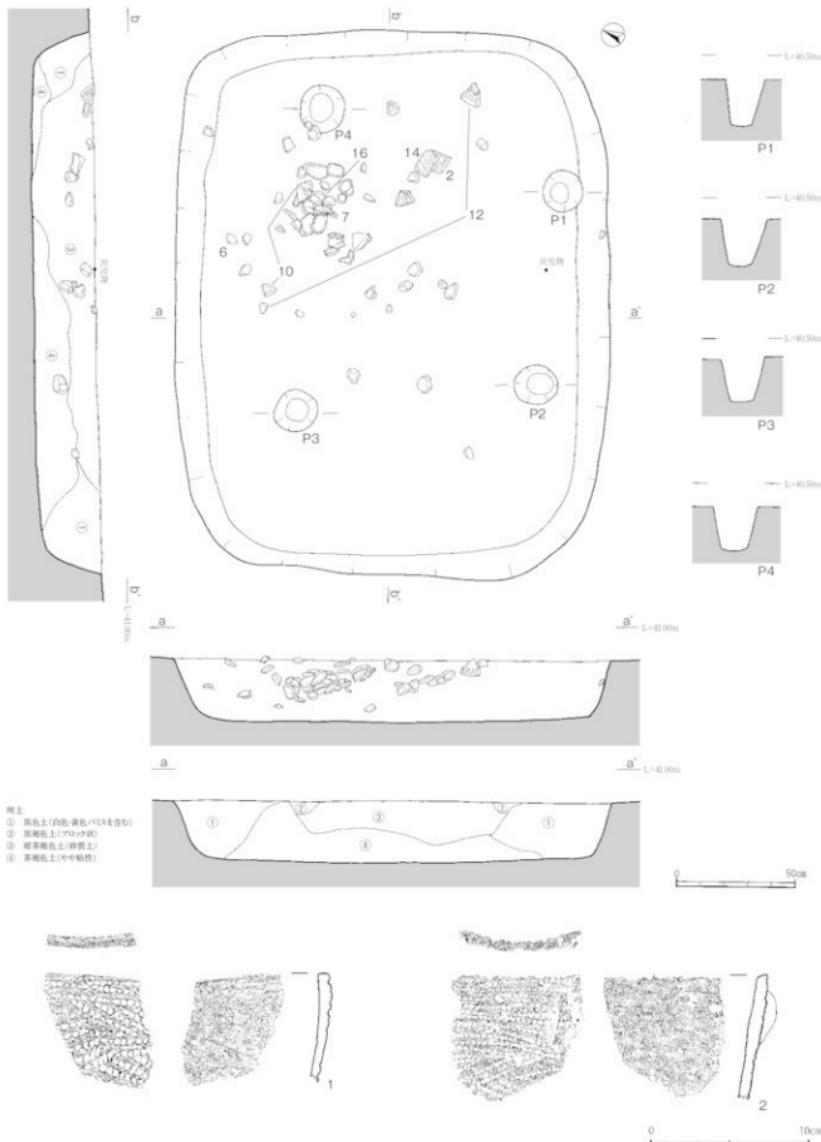
平面形状は291×212cmの楕円形に近い丸長方形を呈し、床面積は3,99m<sup>2</sup>である。主軸は略東西方向である。検出面からの深さは30cmであり、埋土は粒状の白色、黄色バニスを含む硬質の黒色土及び黒褐色土で、下位の床面近くは茶褐色粘質土が不規則に混在し安定していない。床面に硬化面はなかった。住居の埋土中から炭化物が検出され、C14年代測定結果は、 $8,850 \pm 40$ yrBPであった。堅穴住居跡2号の周辺から小ピットが多く検出され、堅穴住居跡を取り囲むような配置であることから、住居を支える柱穴の可能性がある。

埋土より土器片3点、石斧1点、チップ1点総計5点の遺物が出土しており、その中から実測可的な土器片2点、石斧1点の計3点について実測し掲載した。17・18は、外開きに直線的に立ち上がる円筒形の土器である。17は口縁部で口唇部に平坦面を持つ。外面上には、幅約3mmで浅い凹線に近い文様が縦位に施されている。18は胴部片であり、外面上に斜位の貝殻刺突文を羽状に施す。VI類の下剥峯式土器に有する特徴である。内面は丁寧なナデ調整である。19は石斧の刃部先端部分である。ホルンフェルス製の磨製石斧で、その大きさや厚さから小型の石斧であったと考えられる。刃部は鋭く丁寧に研磨されている。

#### 堅穴住居跡3号（第22図）

D-21区、東側へ緩やかに下していくほぼ平坦面で、VII層上面から検出された。東側の一部が堅穴住居跡4号と重複している。周囲に他の遺構は見られず、南西側約5～6m先に堅穴住居跡1号が位置する。

検出面からの深さは25cmであり堅穴住居跡4号の床面よりやや深いことから、床面を明確に判断することが



第18図 積穴住居跡1号及び出土遺物1